大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

＊特集
出版を教えるということ

永江　朗　1
出版の現場と教育の現場

竹中龍太　8
読者を育てる試み――編集と教育と大学と

柴野京子　14
知り、考え、パースペクティブを持つこと――大学における出版教育の意味と展望

福嶋　聡　20
喩えれば登山――書店員教育の（不）可能性について

＊連載

中垣信夫　26
命の形―形の命 No. 08

大学出版部ニュース　28

No. 107
2016.7
夏

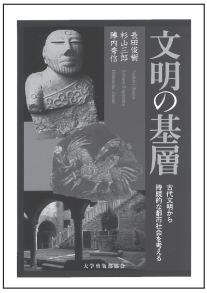
一般社団法人
大学出版部協会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

大学出版部協会・ブックレット

大学出版部協会 発行／東京大学出版会 発売【2015年7月刊】

2014年5月に千代田区立日比谷図書文化館で開催された市民シンポジウム「文明の基層」（総合地球環境学研究所・京都大学学術出版会・大学出版部協会 主催／活字文化推進会議 後援）の内容をブックレット化しました。



長田俊樹　おさだとしき（総合地球環境学研究所名誉教授、神戸市外国語大学客員教授）
杉山三郎　すぎやまさぶろう（愛知県立大学大学院特任教授、アリゾナ州立大学人類学学部教授）
陣内秀信　じんないひでのぶ（法政大学デザイン工学部教授）

文明の基層

古代文明から持続的な都市社会を考える

A5 判・80 頁／定価（本体 1,200 円＋税）ISBN978-4-13-003152-3

古代都市のイメージは大きく変わりつつある。インダス文明の諸都市のゆるやかなネットワーク、中米の古代最大都市テオティワカンでの新しい発見。人はなぜ都市を作ってきたのか、その歴史的基層を中世ヨーロッパのヴェネツィアと比較しながら、改めて都市の魅力と未来への可能性を探る。大学出版部協会ブックレット第3弾。

〈主要目次〉

第一章　インダス文明：ネットワーク都市――中央集権的文明観を覆す（長田俊樹）
「大河文明」は本当か？―広大なインダス文明／インダス文字とインダス印章／草原の遺跡、海岸沿いの遺跡―大河から離れて／砂漠の遺跡の謎／「城塞」と「パスポート」―都市ネットワーク論に向けて／墓から見えるもの―格差の不在／砂丘が先か、文明が先か／インダス文明は大河文明ではなかった―農業と水害の視点／古代文明観を見直す―「穀物倉」と「アーリア人侵入説」／文明の衰退について考える／ゆるやかなネットワークの存在／都市社会をどう見るか―中央集権的文明観からの解放

第二章　新世界最大の古代都市テオティワカン：英知の集積としての都市（杉山三郎）
閉ざされた空間の多様性／文明の萌芽／認知能力＝知恵こそが、文明の基盤をなす／中規模都市ができ始める／完全計画都市、テオティワカン／多くの人を迎える巡礼地として／暦と数の体系／「太陽のピラミッド」と「月のピラミッド」の二元性／墓は語る／古代人の交流―物を集めるネットワーク／文明の確立から崩壊へ―伝わり、つながる文明の諸要素

第三章　水都ヴェネツィア：交易都市から文化都市へ（陣内秀信）
水と共生する町、ヴェネツィア／逆・中央集権的構造都市―複雑に交差する水と陸のネットワーク／都市を解読する／交易都市から文化都市へ／オリエント志向と柔軟性／分散的都市から統合的都市へ／なぜ都市に人が集まるか／城壁の無い町／都市モデル再考／川が結ぶネットワーク／水車の活用／考古学調査がヴェネツィアのイメージを変える／ヴェネツィアの食と産物のネットワーク／ラグーナは自然・環境・歴史の宝庫―文化都市から環境都市へ

特集＊出版を教えるということ

出版の現場と教育の現場

永江朗（ライター）

大学で教える

二〇〇八年の四月から二〇一三年の三月まで、私は早稲田大学で出版について教えていました。最初の一年は客員教授として、二年目からは任期付教授として。早大は学部をグループごとに学術院と呼んでいて、私が所属した文学学術院には文学部と文化構想学部があります。初年度と翌年度は、授業はすでにないにもかかわらず留年した学生たちがいた第一文学部・第二文学部もありました。それ以前も法政大学や東京大学先端科学研究所で出版流通や取材のしかたなどについて、単発で授業をすることはありましたが、通年で、しかも研究室も与えられてというのは初めてのことでした。

前年の春、教授（テニュア）の青山南さん（英米文学）と芳川泰久さん（仏文学）から、渋谷のカフェで客員教授就任を打診されたとき、最初はお断りするつもりでした。その前からもいくつかの大学から非常勤講師のお話をいただいていましたが、いずれもお断りしていました。理由は、自分が教師には向いていないと思っているのと、編集について学校で教えるのは無理だと考えていたから。ところが青山さんと芳川さんから「新しくできた文化構想学部では、ひろく出版界で活躍する人材を育てていきたい。作家だけでなく、編集者や流通にかかわる人びと、書店や取次という就職先も視野に入れていきたい」といわれて困ってしまいました。私は常々、大胆な流通の改革がなければ日本の出版産業はいずれ行き詰まってしまうだろうと考えていたからです。そのような人材を育てるために時間を割くのは、意味のあることではないだろうかと悩みました。一週間ほど時間をいただき、妻とも相談して、お引き受けすることにしました。一肌脱ぐというと大げさで格好つけた感じで

すが、ライターとしての仕事は大きく制約されますので、それなりの覚悟をしたわけです。もっとも、当初は三年間という話で、それが五年に延長されたのは予定外でしたが。

授業で教える

私が受け持ったのは、少人数の演習と、大教室での授業です。演習は「エディター文学論」（前期）、「雑誌論」（後期）、「書物の経済学」（前期）、「ライターという仕事」（後期）、「モノとしての書籍」（前期・後期）で、それぞれ四〇人ほどの学生が受講しました。大教室では「出版文化論」（前期・後期）で、こちらは文化構想学部のほかにも文学部や他学部の学生も受講していて、定員四〇〇人でした（年に二度行う試験の採点と成績評価は地獄でした）。そのほか、卒業論文・卒業研究の指導が一〇人前後。二〇一一年からは大教室での講義はなくなりあらたに大学院で「本とコンピュータ」という演習を行いました。

編集という行為を学校で教えることは無理ではないかというのは、出版社に勤務していたときの実感や、その後、編集者たちとの雑談から考えたことでした。本のつくり方、編集のしかたは、ジャンルによっても本によってもずいぶん違いがあります。出版社によっても違うし編集部でも違う。同じ編集部でも編集者によって違う。編集者を育てるにはＯＪＴしかない。現場で失敗と成功を繰り返し経験することでしか編集者にはなれない。そう考える編集者が私のまわりにはたくさんいました。それは編集者養成をうたう専門学校等の卒業生を新入社員として受け入れての実感でもあったと思います。

それはいまも半分は当たっていると思います。たしかに編集という仕事の流れや、原価計算の方法や、校正記号の使い方は教室で学ぶことができます。でも、それだけで一冊の本をつくれるわけではありません。学校で学ぶよりも、出版社で働いて、校了直前まで三日連続で徹夜したり、大きな誤植を見逃して叱られたり、できあがった本が書店に積まれているのを見て感動したり、という経験の積み重ねのほうがはるかにプラスになります。大学では編集技術を学ぶよりも、法律学なり経済学なり、あるいは社会学でも哲学でも文化人類学でも、アカデミックなスキルをある程度身につけたうえで出版業界に入って、本のつくり方や流通についておぼえていったほうがいいのではないかと、現在も思っています。

出版現場の実際

ただ、出版界の第一線で働く人びとがあまりにも本のことを知らないと感じていたのも、早大からのお話を承けた理由のひとつでした。

たとえば――さすがに最近はそうでもなくなりましたが――一〇年くらい前までは、再販制について正しく理解できていない編集者が珍しくありませんでした。「書物の値

引きは法律で禁じられている」などと話す書店経営者もいました。独占禁止法と著作物再販の関係がよくわかっていないのです。だからなぜ大学生協では値引きが行われているのかもわかっていない。「生協は違法だ」などという編集者や書店員もいたほどです。

あるいは、日本の出版産業の経済的経営的構造がどうなっているのかを把握できていない。大手の総合出版社が高い賃金を社員に払えるのは、ファッション誌の広告収入やコミックの売上が大きいからですが、それを直視できない書籍編集者も珍しくありません。

もっと大きくいうなら、いま目の前に見えている現実だけがすべてだと思っている出版関係者がいかに多いか。書物も、出版流通も、作家も、常に変化してきました。いまある書物も流通システムも昔からあったわけではありません。変化の積み重ねの上に現在の姿があり、これからも変化をしていくものです。ところが出版業界には、変化に対して怯えたり、反発したり、変化を促すものを攻撃したりする人がいます。

その典型は電子書籍に対する反応でしょう。ちょうど私が早大の教壇に立つ前後から、電子書籍をめぐる環境が急激に変化しました。アマゾンが日本でもサービスを始めたり、スマートフォンやタブレットの普及が始まったり。紙の本が滅びるのではないかと悲観する人もいれば、電子書籍なんて一時の流行にすぎないと冷淡にいう人もいます。しかし、書物の歴史は、五〇〇〇年前の古代メソポタミアから延々と続いてきたのであり、しかも粘土や動物の骨や皮、植物の皮や繊維など、書物の材料も変化を続けてきました。電子書籍の登場は、たんにそこに新たなものがひとつ加わったにすぎない。慌てることも大騒ぎする必要もないはずです。電子書籍が印刷本にとってかわるかどうかは別として、印刷本だけが本だったわけでもありません。

出版流通についてもそうです。取次を軸にした日本の出版流通システムしか見えていない人が多い。そういえば出版社→取次→書店という流通ルートを「正常ルート」と呼ぶ人が、わりと最近までいました。それ以外のルートは「異常」だという意識だったのでしょう。さすがに最近は「通常ルート」と呼ぶようになったようですが、主流でないものを白眼視する体質は変わっていません。しかし冷静に世界を見渡せば、むしろ日本の出版流通システムは先進国のあいだでもかなり特殊なものです。もちろん他国の流通システムにも一長一短があり、単純にどこの国の流通システムが優れているとはいえませんが。

出版界の内部にいる人が本のことをよく知らないのですから、出版界の外にいる人は本のことをもっと知らなくてあたりまえです。もっと本のことを知ってほしい。それも早大で教えようと思った動機のひとつです。しかし、実際に学生たちと話してみると、落差は予想以上でした。

教育現場の実際

たとえば「雑誌論」という演習では、同じジャンルの複数の雑誌を比較してそれぞれの特徴を探す、という課題を出しました。一般週刊誌や女性ファッション誌などを題材に選んだのですが、いまどきの学生は雑誌を買わないのですね。「雑誌を買ったのは中学生のとき以来、五年ぶりです」なんていう学生もいました（五年も雑誌を買っていないのに早大文化構想学部に通う、そして私の演習「雑誌論」を選択するというのも、謎ではあるのですが）。

ある学生は、一般週刊誌の比較研究で「週刊誌って、悪口ばっかり書いてあって、すごくいやな気持ちになります」と涙目で発表しました。「右手に（朝日）ジャーナル、左手に（少年）マガジン」なんていわれたのは遠い昔（というか、彼らの祖父母の時代ですね）。いまの学生が週刊誌を買うのは、難関大学の高校別合格者発表の号だけのようです（自分が受験した年度のものは各誌保存しているという学生がけっこういました）。雑誌ジャーナリズムの存在意義について講義をしたうえでの研究と発表だったのですが、週刊誌に限らず雑誌というもの自体が学生たちにとっては身近ではないことを痛感しました。

演習「書物の経済学」では出版物をお金という観点から研究しましたが、学生たちは印税額や書店マージンなどについて知って驚いていました。本を一冊書いたところで、そこから得られる作家の収入は少なく、とてもそれで食べていけるものではないこと、メディアで華々しく活躍しているように見える作家はごく一握りでしかないこと、書店の利益が少なく書店員の給与も低いことなどです。

学生たちとはよく話しました。授業中や講義の終了後に教室で話すこともありましたし、研究室に彼らがやってくることもありました。お昼のお弁当を研究室で食べる学生もいました。私が学生に教えたことよりも、学生たちから教えられたことのほうが多かったように思います。

たとえば「雑誌論」の演習で、週刊誌の執筆者の年齢について分析した学生がいました。予想以上に高齢化しているのに驚きました。いまや週刊誌は老人が書いて老人が読むメディアです。学生は「若者は雑誌メディアから拒絶されている」と結論づけました。「読者のニーズに合わせて」とはよくいわれることですが、その「読者」をどう設定するかで「ニーズ」も変わってきます。「若者の読書ばなれ」は嘘である、というのは私が授業でたびたび指摘したことですが、出版界が若者に背を向けるようにして本や雑誌をつくってきた側面は否定できません。

書店や古書店についての認識もそうです。学生たちにもっとも認知度の高い書店はアニメイトでした。よく利用するという学生とけっして近づかないようにしているという学生がいて、反応は両極端なのですが、とにかく存在は知っている。大手ナショナルチェーンの書店よりも高い認知

度でした。ブックオフの人気も高く、中国からの留学生は、「日本に来ていちばん感動したのがブックオフです。この文化はぜひ中国に持ち帰りたい」と語っていました。

授業に対する関心は高く、出席率も八割以上でした。欠席の理由も、就職活動や部活動、体調不良がほとんどで、たんにサボる学生はあまりいませんでした。出版業界・メディア業界への就職を希望する学生もたくさんいました。研究室に来ては就職相談する学生もいて、エントリーシートの添削を求められることもありました。

出版業界・メディア業界は昔から人気の高い業種ですが、それには注釈が必要だと思います。経験も知識もない学生たちは、世の中にどんな仕事があり、どんな企業があるのか、はっきりとイメージできていません。彼らにとって出版社は、新聞社や放送局と並んで、身近でイメージしやすい仕事なのです。しかし、そのイメージといっても、たとえば書籍や雑誌はよく目にするけれども、それらが具体的にどのようにつくられ、どのように流通するのかがわかっているわけではありません。私の授業にはゲストとしてさまざまな出版社の編集者や取次の幹部社員にも来てもらいましたが、多少なりとも彼らが現実を知るうえでプラスになったのではないかと思います。

大手・中小の出版社に就職した卒業生もいますし、取次や印刷会社に就職した卒業生もいます。大手ナショナルチェーンの書店に就職した卒業生から、売場で声をかけられることもあります。

出版の未来を構想する

早大での任期が終了して三年が経過しました。一三年度と一四年度は、近畿大学で出版流通について非常勤講師として講義をしました。いま振り返ってみて、あれこれ反省することもたくさんあります。いちばん大きいのは「流通も含めた出版業界で活躍できる人材の育成を」と思うあまり、実学的な側面に力を入れすぎたのではないかということです。もう少し書物の文化や出版の文化を広くとらえて、

保守の比較政治学
＿欧州・日本の保守政党と＿ポピュリズム
水島治郎 編
右翼ポピュリスト政党の躍進に対応する欧州各国の保守政党の比較に，日本についての一章を加える．保守政治に関する初の体系的研究．
A5判・本体4800円

カエサル戦記集
アレクサンドリア戦記 アフリカ戦記 ヒスパーニア戦記
高橋宏幸 訳
前48年のポンペイウス没後も続く，カエサル派と反カエサル派との内乱．その熾烈な攻防を描いた貴重な三作品の本邦初訳．
四六判・本体3000円

人類の未来と地球科学
井田喜明
科学と近代文明は，地球環境とどのように関わっているのか．人類を支える地球の「限界」はどこにあるのか．
【岩波現代全書】
四六判・本体1800円

浄土系思想論
鈴木大拙 解説＝木村宣彰
浄土思想の諸相と特質を，大拙の則非の論理によって，明らかにする．
【岩波文庫】本体970円

岩波書店
東京・千代田・一ツ橋
（定価は表示価格＋税）
http://www.iwanami.co.jp/

そのなかで現代日本の出版産業を位置づけていくようなやりかたがあったのではないか。

たとえば演習「書物の経済学」では書籍の原価計算の方法や価格決定のしかた、雑誌の広告収入と販売収入の比較研究などを、学生とともに調べました。どうせなら職業作家の誕生以前と誕生以降だとか、平安の王朝文学とパトロンの関係、寺院と経の出版、電子書籍の経済構造など、もっとさまざまなことを扱えたのにと思います。

あるいは「モノとしての書籍」では書物を解体して構造を調べたり、文庫本をハードカバーに仕立て直したりという実習をしましたが、そこに歴史的な視点を入れて、書物の形態の変化と必然性など、もっと文化史的なものに踏み込めばよかったと思います。そうすれば印刷本と電子書籍が地続きであることも理解しやすいでしょう。

大学でいま目の前にあることを学べば、たしかに出版の現場に入ってある程度の即戦力にはなるかもしれませんが、長期的視野に立って、なぜ書物がこのような形態をしているのか、なぜこのような流通システムをとっているのかはわかりません。変化のない安定期ならそれでもいいのでしょうが、現代の若者に求められるのは前例を踏襲することではなく新しいものをつくることであり、古いものを破壊することです。ものを的確に破壊するには、歴史に対する知識と見識が必要です。実学的なことではなく、もっと原理的なことを教えるべきでした。

大学の現場では出版界のＯＢや新聞界のＯＢが教員として勤務することがよくあります。しかし私も含めて、出版界に首までどっぷり漬かった人間は、ともすれば自分の経験をベースに世界を見て、現状について肯定的に語るところから出発しがちです。出版流通についても、書物の価格決定についても、つい「こうなっている」という話に終始してしまい、「それでいいのか？」「よりよく変えるにはどうすればいいのか？」という視点が欠落しがちです。大学という場のいいところは、あらゆるしがらみ抜きに、自由に発想することができることです。日本の出版界の「常識」は一〇年後、二〇年後には通用しなくなるのですから。

私は五年間（近畿大での非常勤も含めると七年間）、日本の出版産業の「いま」を教えてきたわけですが、教育の現場では出版の現場でできないことこそ考えたり教えたりするべきだと現在では考えています。私は「出版文化論」の講義で、変化は外部からもたらされると話しました。この三〇年、日本の出版産業を変えてきたのは、常に外部から来た人びとでした。一九九〇年にブックオフを始めた坂本孝は中古ピアノの買取販売とドラッグストアのマツモトキヨシからあのビジネスを思いつきました。アマゾンを始めたジェフ・ベゾスは大学でコンピュータを学び、ヘッジファンドで働いていました。ＴＳＵＴＡＹＡを運営するＣＣＣはレンタルレコード店から始まりました。やや誇張していうなら、出版の現場には出版の未来はないのかもし

れない。ならば教育の現場で出版の未来を構想すべきなのではないか。

出版について教える場

早大での勤務とほぼ同時にJPIC（一般社団法人出版文化産業振興財団）の「読書アドバイザー養成講座」の監修と専任講師を引き受けました。こちらは現在も継続しています。この講座は一般社会人が対象で、毎年一〇〇人の人びとが半年あまり受講します。受講者は出版社や書店、取次に勤務する人が三分の一、学校図書館も含めた図書館関係者が三分の一、読み聞かせなど読書推進運動にかかわる人が三分の一ぐらいという構成です。毎年、北海道から九州・沖縄まで、全国から参加します。東京でのスクーリングが年四回八日間。受講料に加えて地方の参加者は交通費や宿泊費までかかるのですから、かなりの負担になります。仕事を持っている人は大変でしょう。二〇代から七〇代まで、圧倒的に多いのは女性ですが、ここ数年、男性の参加も一〇人前後にまで増えてきました。

「読書アドバイザー」は公的な資格ではありません。スクーリングとレポートによる全課程を修了すると修了証が渡されますが、それがなにかの仕事につながるものでもない。読書について深く知りたい、読書推進普及の力になりたいという人が集まっています。講座では出版史や出版流通、編集、装丁・造本、古書、図書館などのことから、書評の書き方や読書イベントのつくり方まで、本についてさまざまな角度から第一線の人びとによる講義が行われます。

レポートの提出は三回あり、そのつど全員に私がコメントを書き込んで返却します。図書館司書など書物について専門教育を受けた人と、そうではない人とではレポートのレベルには差がありますが、しかし、書物と読書に対する関心という点では皆さん熱いものがあり、学生たちのそれとはちょっと違います。出版の現場とも公教育の現場とも違うところでの出版についての教育が求められているのだと痛感します。

新刊案内

尾崎俊二著
ワルシャワから
記憶の案内書トレブリンカ、ティコチン、パルミル、ブルシュクフへ
モニュメントや現場跡地から過去にさかのぼる歴史の紙上ロードムービー、「記憶する意志」を感じさせる街の歴史「案内書」。
菊判・三二〇頁・本体四五〇〇円

ミリネ編／皇甫康子 責任編集
家族写真をめぐる私たちの歴史
――在日朝鮮人・被差別部落・アイヌ・沖縄・外国人女性
日本社会で生きる女性たちが語る、私たちの歴史・私たちの表現。
A5判・二六四頁・本体二二〇〇円

田中正司著
アダム・スミスの経験論
――イギリス経験論の実践的範例
『哲学論文集』で展開された主体的・実践的な経験認識の理論をアリストテレスとヒュームやカントとの対比で解明する。
A5判・一二〇頁・本体一八〇〇円

小山久美子著
標準化と国際貿易
――国際貿易体制と米国貿易政策の歴史と現状
「非関税障壁としての標準化」という新視点から、米国を中心に国際貿易体制と「各国で異なる標準」の関係史を分析。
A5判・一〇四頁・本体一〇〇〇円

御茶の水書房
〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751
http://www.ochanomizushobo.co.jp/

特集＊出版を教えるということ

読者を育てる試み——編集と教育と大学と

竹中龍太（編集者）

何を教えたらよいのか

あなたが編集者であるとして、「出版」あるいは「編集」にかんする授業を担当することになったら、学生に何を教えますでしょうか。一回のみの講演形式であれば、求められる個別具体的なテーマに応じて話すことで、その役割を果たすこともできるでしょう。しかし大学の通常の科目では、半期一五回、一年だと三〇回の授業を組み立て、講義をし、成績をつけなければなりません。これは、本づくりに携わる者にとって、もしかしたら、売れる本の企画を考えることよりも悩ましいことかもしれません。

いま、「出版」とか「編集」とか、さらに広く「メディア」とか「表現」などといった言葉を冠した科目を設けている大学は少なくありません。[注] そして、そうした授業を担当する教員の大半は、編集やデザインなどの実務経験者ではないでしょうか。

かく言う私もその一人です。そこで、ここでは、編集者の私が大学で試みていることの一端をご紹介しつつ、「編集」を教えることの意義をめぐって、私なりの考えをまとめてみたいと思います。

「編集」は身近に遍在している

私は、東京・日野市にある明星大学人文学部で、非常勤講師として二〇一一年から「編集論」（前期）と「編集工学」（後期）という授業を担当しています（同学部の日本文化学科には「デジタル編集論」と「ＤＴＰ編集」という科目もあります）。

「編集論」は、同学部の五つの学科の学生が選択できる科目で、年によって異なるものの、毎年だいたい八〇名程度の学生が履修しています。そのほとんどは三年生で、将

来、出版業界で仕事をしたいと思う学生から、本を読むことやモノづくりが好きな学生、友達に誘われたから履修したという学生まで、履修理由も興味関心の度合いもさまざまです。そもそも「出版」や「編集」は、経済学とか歴史学とか言語学などといった長い歴史のなかで築かれてきた体系的な学問とは異なる科目です。そうしたことを前提として、私は「編集論」の一五回の授業を、おもに次の六つの柱で組み立てています。

1　「編集」の概念とその定義。
2　歴史を見る眼・現在を見る眼。
3　メディアの役割と公共性をめぐって。
4　書物・出版の歴史（世界と日本）。
5　編集の現場から（映像・デジタル・出版の各領域）。
6　社会における「編集」の役割。

毎年、初回の授業では、外山滋比古、松岡正剛、鷲尾賢也、藤原良雄、仲俣暁生の各氏などの示唆に富むさまざまな「編集論」を読みながら、「編集」とは何かについて学生とともに考える時間をもっています。

たとえば、外山氏は『エディターシップ』（みすず書房、一九七五年）のなかで、次のように記しています。

どんなに平凡で単調と思われる生活でも、子細に見れば実に複雑な起伏をもっているし、一日、一日は決して同じものではない。同じようなことをしていても、人によって「一日」のもっている意味はまったく違っている。ひとりひとりが自分の「一日」をつくりあげる「編集」法が独特なものだからである。そういう一日一日を積み重ねて、一週、一ヵ月、一年、十年というように、より大きな人生の雑誌を編んでゆく。波瀾に富んだ人生というのは相互に異質な要素の織りこまれた統合作用の結果で、それが自他ともに生甲斐の喜びを与えるのは、われわれが生れながらにして無自覚のエディターだからであろう。（同書所収「統合の傾向」）

そして、外山氏はさらに、「人間の知的活動のきわめて大きな部分が統合作用によっているわけで、人間はすべて生れながらのエディターであ」り、「新聞、雑誌などの「編集」は、その氷山の小さな一角のさらにまた特殊な一部でしかな」く、「エディターシップとは、いわゆる編集にその露頭を見せている全人間的機能ということになる。人間の文化とはこの広義のエディターシップの生んだ文化である」と述べています。

こうした認識に基づいて、私たちの日常生活には、「編集」という知的な営みが遍在しているということを、まず学生たちに伝えることから授業を始めています。

たとえば、授業でノートをとることも、今日着る服を選ぶことも、料理を作ったり食べたりすることも、一日の予定を組み立てることも「編集」なのです。そのとき、人間

は想像し（イメージし）、選択をしています。そして、よりよい選択のために想像する過程には、価値判断をするための〈疑問をもつこと＝問題意識をもつこと〉や〈読み解くこと〉が含まれています。このようにして人は、意識するしないにかかわらず、毎日「編集」を行っているわけです。

学生たちは「編集」に対する従来のイメージとは異なる話に、複雑な表情を見せますが、私はさらに「編集」という営みにおいて大事なことは三つある、と話をします。

すなわち、①本を読むこと（知らないことを知り、自分で考える）、②人の心を読むこと（他者への気遣い、想像力をもつ）、③先を読むこと（歴史を知り、批評意識をもち、新しい価値を生み出す）は「編集」には不可欠な作法であり、これらはその能力を身につけるために必要な訓練であるということです。

こうした考え方は、外山氏が指摘するように、本や雑誌を編集する専門的な職業にのみ適用されるものではなく、あらゆる仕事、あらゆる人間の営みに敷衍できる考え方ではないでしょうか。そう考えれば、「編集」を教えることの目的の一つは、読む力を養い、読者を育てることであると言えるかもしれません。

さて、先に挙げた六つの柱それぞれについてふれる余裕はありませんが、授業では、本を読んでレポートを書く課題や、原稿依頼の手紙を書く課題、いくつかの文例から適切な文章を選んだり適切に書き直したりする問題、あるテーマについて考えたことを発表するなど、さまざまな課題も出しています。また、「編集の現場から」としてゲストを招き、専門分野の実務経験と知見をふまえた講義をしていただいています。こうした取り組みを通じて、「編集」という営みの本質を立体的に学ぶことで、他の学問分野への理解をはじめ、将来の仕事や社会生活に活かすことができるのではないかと考えています。

ビブリオバトルと冊子制作の試み

一方、後期の「編集工学」は、日本文化学科の選択科目で、履修者は毎年二〇名前後です。この授業では、前期の「編集論」とは異なり、ひと組六、七名でグループを分け、より実践的なカリキュラムを心がけています。

たとえば、半期の授業のうち、前半は学生各自が選んで読んだ本を取り上げてビブリオバトルを行い、後半はグループごとにA5判の冊子を制作しています。これら二つの課題を柱に、それらを成し遂げるために必要な基礎知識を伝え、指導しています。

ビブリオバトルは、本誌一〇三号（二〇一五年七月）の特集「新しい読書のかたち」に触発されて、昨年から試みている取り組みですが、まずグループごとに「予選」を行い、そこで代表者を選び、次にグループ対抗の「本大会」を行います。「本大会」では、グループの代表者がクラス全員の前で発表し、その発表にかんする討論を経て、最も

読みたくなった本を投票で選ぶわけです。

学生たちは、当初の不安はどこへやら、それぞれが取り上げた本に対する想いを一生懸命に語り、発表者の話に熱心に耳を傾け、生き生きとした表情を見せてくれました。ビブリオバトルを終えて、「こんどは共通の課題図書でやってみたい」と提案する学生もいて、今後、一冊の本をみんなで読む読書会形式も試みてみたいと考えています。

グループごとに冊子を制作する課題では、まずそれぞれの冊子のテーマ（コンセプト）を考えることから始めます。次に、そのテーマに基づいて見開き二頁（以上）の企画を個人で考えます。冊子は中綴じなので、表紙を含め全体の頁数は四の倍数になるようにし、台割をつくってノンブルを付けます。表紙や目次、奥付などの要素はグループ内で相談して分担します。個人に課せられた見開き二頁は、ＤＴＰなり紙の版下なりでグループごとにまとめて提出し、印刷（カラーコピー）ののち、綴じる作業もグループごとに行います。そして、完成品を手に、グループごとに冊子のコンセプトとその出来の自己評価を発表し、それぞれの冊子についてクラス全員で批評し合います。

学生たちはグループみんなで一冊の冊子をつくった達成感を感じながらも、たいていは「もっとこうすればよかった」と悔しい思いを抱きます。それは教育の成果の一つであると私は思っています。なぜなら、そうした悔しさは向上心のあらわれであると思うからです。

こうした実践的な試みは、すでに多くの授業で取り組まれていることかもしれませんが、共同作業と個人作業を進めながら、「編集」の基礎を身体で学ぶことができる機会となるのではないでしょうか。そして、「編集」という営みが「読む」ことと深く結びついているとすれば、ビブリオバトルや冊子制作などの実践的な作業も、読む力を育むことにつながるはずであると考えています。

大学出版部の一員としての教育実践

より実践的、実務的な教育の経験をもう一つ、ご紹介しましょう。

二〇〇八年から一三年にかけて、私は東京外国語大学出版会に勤めていました。東京外大では、当時学長であった亀山郁夫氏の強力なリーダーシップのもと、二〇〇八年に学内組織として出版会を設立し、私は編集者としてその基礎づくりに携わりました（東京外大出版会の設立の経緯は本誌八二号［二〇一〇年六月］および九〇号［二〇一二年四月］を参照）。出版会の専任スタッフは当初私一人だけでしたが、新しい「場」をつくることに心躍り、気持ちばかり前のめりになりながら、いろんなことを試みました。そのうちの一つが学生を対象とした「出版実務研修会」の企画・運営です。

これは、出版業界への就職を志望する学部三年生と大学院生を対象に、学内から希望者を募って行われた研修会で、

本づくりの基礎知識や出版業界のしくみ・慣習・課題、そして編集や校正の実務の基本などを指導するとともに、出版社や書店、印刷会社（出版印刷と活版印刷）、紙屋さん、博物館などにお願いして見学させていただき、現場の方のお話をうかがいました。

毎年、夏休みの時期に二週にわたって六日間程度、五名ほどの学生を指導しましたが、学生にとってはいわゆるインターンシップに近いものだったのかもしれません。研修を通じて、「自分には本づくりの仕事は向いていないかも」と、出版業界への志望をとりやめる学生もいれば、仕事のイメージが具体的につかめ、会社の雰囲気もわかってますます出版業界への関心が深まった、という学生もいました。

在職中に数回実施したこの試みをきっかけに、研修を受けた学生に出版会のアルバイトとして調べものや外国語の校正などを手伝ってもらったり、春休みに『ピエリア』という読書冊子の編集業務に加わってもらったりしたことも、他に替えがたい成果の一つだったと言えるでしょう。

とりわけ『ピエリア』の編集では、学生とともに企画を考え、原稿を書いたり、教員へのインタビューをまとめたりと、編集の実務を経験してもらいました。実務研修や編集作業を通じて、学生に出版会の存在とその活動を知ってもらい、さらに願わくば将来、自分の後輩、つまり出版の世界の仲間になってほしいという気持ちを込めて企図したことですが、その一方で、学生にとってはふだん経験できない教育の機会となったのではないかと思います。

大学出版部が担う教育をめぐって

本誌一〇一号（二〇一五年一月）の特集「大学と大学出版部の連携」で、大阪大学出版会の川上展代氏が「大阪大学ショセキカプロジェクト」を紹介しています。これは、学生・教員・大学出版部の三者をつなぐユニークな試みとして多方面から注目を集めていますが、その成果である『ドーナツを穴だけ残して食べる方法　越境する学問――穴からのぞく大学講義』（大阪大学ショセキカプロジェクト編、大阪大学出版会）の面白さと評判以上に、その過程の試み――すなわち「本をつくる」という授業の企画・運営は、教育的見地からも、そして大学出版部の機能展開という観点からもきわめて示唆に富む瞠目すべき取り組みであるように思います。

また、本誌一〇三号（二〇一五年七月）で京都大学学術出版会の鈴木哲也氏が紹介している、学生を対象とした「専門外の専門書を読む」読書会の試みは、大学出版部が果たすべき役割の素晴らしい好例を示しているように思います。

思えば大学は、著者（研究者）と読者（学生）が集まっている特異な空間です。そこで知が生まれ、伝えられ、育まれるとすれば、そしてそこに大学の名を冠した出版部があるのなら、その両者をつなぎ、それをさらに社会に広く訴えていく役割は、今後ますます社会から期待され、求め

られていくのではないでしょうか。

そこで私が（いくらか無責任に）提案したいのは、次のような試みです。

1　大学出版部（とくに編集者）は、「出版」や「編集」にかんする大学の授業に積極的に参加し（あるいは新たに科目を設け）、そのカリキュラムの策定から教授までを担うこと。

2　さらに、大学出版部は、「出版」や「編集」にかんする科目のみならず、大学のカリキュラムの策定や授業設計に大学教員とともにかかわること（これは、あらゆる研究の専門化・高度化が進むなかで、より広い視野と社会のニーズを捉えることができる編集者が有意義なアイディアを提供できるはずと考えるからです）。

3　2の実現が困難であれば（あるいは実現できるとしても）、大学出版部は、大学や地域主催の市民講座のカリキュラムの策定や授業設計にかかわること。くわえて、書店の棚の構成に書店員とともにかかわること。

人文書・学術書出版の世界とともに、大学の文系学部に冷たい向かい風が吹き荒れているなかで、たとえば大学における「出版」や「編集」の教育実践の目的として考えられることは、やはり一人でも多くの読者を育てることであるように思います。それは、他の学問がめざしている道と同様、あるいは私たちがふだん従事している本づくりと同様、地道な実践を通じてしか実現しないものかもしれません。しかしその実現のために、事業組織の利害や立場を超えて、出版に携わる私たちができることは、決して少なくないでしょう。私もまた、知の活性化を促し、読者を育てることの一端を、日々の仕事を通して担っていきたいと考えています。

（注）『総合ジャーナリズム研究』（二〇〇四年度）および出版研究者の蔡星慧氏の調査（二〇一〇年）によると、「出版」や「編集」にかかわる講座がある大学は、少なくとも五〇以上にのぼる。

平安語の宝庫、ついに成る！

平安時代記録語集成

上巻／下巻 附 記録語解義

峰岸　明著　国語学の権威が蒐集した、平安時代の日記に使用されたことば〈記録語〉約3万を集成。

各34000円　『内容案内』送呈

日本古代の交通・交流・情報

全3巻完結　舘野和己・出田和久編

❷旅と交易

文学作品や記録から多様な旅の実態を再現。情報の広がりを考える。

❸遺跡と技術

交通に関わる施設と技術から様相を描き出し、その景観を考える。

各5500円　〈既刊〉❶制度と実態

藤原実資（さねすけ）が綴った日記を現代語訳化

甦る平安宮廷社会！　倉本一宏編

現代語訳 **小右記** 全16巻 刊行中

❷道長政権の成立（第2回）

永祚元年(989)正月～長徳元年(995)10月

2800円　『内容案内』送呈

東北の古代史 全5巻

完結！　各2400円

❹三十八年戦争と蝦夷政策の転換

鈴木拓也編　九世紀を生きた「敗れし者」ではない蝦夷の姿。（最終回）

〈既刊〉❶北の原始時代…阿子島香編／❷倭国の形成と東北…藤沢敦編／❸蝦夷と城柵の時代…熊谷公男編／❺前九年・後三年合戦と兵の時代…樋口知志編

大学でまなぶ日本の歴史

木村茂光・小山俊樹　1900円

戸部良一・深谷幸治編　【2刷】

「暗記する日本史」から「考える日本史」へ―。高校教科書とはちがう新たな「日本史」との出会い。

吉川弘文館

〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8

電話03-3813-9151／価格は税別

2016年版『出版図書目録』送呈

知り、考え、パースペクティブを持つこと——大学における出版教育の意味と展望

柴野京子（上智大学文学部新聞学科准教授）

七年ほど前から、複数の大学で出版関係の授業を担当している。本務校でシラバスに掲載している授業としては、出版論、大衆文化論（雑誌論）、デジタル・アーカイブ論、学部と大学院のゼミ、初年次の演習などがあるが、本稿では出版論と雑誌論の授業（別表参照）を素材に、大学で出版を教える意味とスタンスを確認したい。

大学の出版教育に制作実習は必要か？

上智大学の新聞学科には、留学生も含めて、現在約二五〇名が在籍している。メディア業界への志望は比較的多く、関連領域まで含めると三割程度がそれらの企業に就職する。ただし、カリキュラムとして、とくに職業的なスキルに特化した科目を揃えているわけではない。専任教員の約半数は実務経験者で、各業界から講師も招いているが、学科方針としては理論と実践の両面を掲げる。コンテンツ制作の科目は映像系が中心である。筆者が着任する以前には、編集者の講師による雑誌制作も行われていたが、現在そうした科目はない。

これにはいくつかの理由がある。まず、出版編集を授業で行うには限界があり、作業レベル、あるいは一般的なレベルでの指導にとどまらざるをえないと思われること。第二に、つくらせたとしても、おそらくは「どこかで見たような、そこそこクオリティの高い、それらしいもの」が量産される可能性が大であること。したがって評価基準があいまいになること。第三に最も重要な点として、「紙の冊子、あるいは雑誌を作る意味」を問わずに（何の疑問もなく所与として）、それを行うことへの違和感、である。総じて、現時点での「出版」を対象とする大学教育において、制作の目的と有効性が明らかではないことによる。

誤解のないよう断っておくと、大学教育のなかで冊子の

出版関連の講義概要（いずれも学科開講の専門科目のみ、2016 年度）

出版論Ⅰ　本と出版の現在	メディアと文化Ⅳ（大衆文化論）雑誌論の可能性
2-4 年次 100 名、前期開講（後期・出版論Ⅱは近代史と理論）	2-4 年次 100 名、前期開講（後期はマンガなどのポピュラーカルチャー研究）
1　イントロダクション　出版を考えるということ	1　イントロダクション
2　出版産業の構造(1) しくみと特徴	2　ジャーナリズムとしての雑誌
3　出版産業の構造(2) 出版社の概要	3　文学としての雑誌
4　出版産業の構造(3) 取次システムと委託制度	4　雑誌のグラフィズム……名取洋之助『写真のよみかた』
5　インターネット、デジタル時代の出版(1) アマゾン化する書店／再販制度	5　カルチャーとしての雑誌(1) 見る雑誌『平凡』文化
6　インターネット、デジタル時代の出版(2) 電子出版とは	6　カルチャーとしての雑誌(2)『平凡パンチ』の伝説
7　インターネット、デジタル時代の出版(3) 電子書籍元年と動向・課題	7　消費としての雑誌、あるいはカタログ……『ポパイ』
8　インターネット、デジタル時代の出版(4) グーグルブックスの波紋	8　雑誌とジェンダー　お嬢様と主婦の近代
9　図書館・書店の現在(1) デジタル時代の大学図書館	9　ファッション誌考……『装苑』『若い女性』から『アン・アン』
10　図書館・書店の現在(2) 公共図書館と地域ネットワーク	10　ミニコミ、運動としての雑誌……『思想の科学』とその周辺
11　ゲスト講義	11　ミニコミとサブカル……虚構の時代のカウンターカルチャー『ビックリハウス』
12　図書館・書店の現在(3)「リアル」書店と読者の居場所	12　情報としての雑誌……『ぴあ』の時代
13　まとめ、出版の未来	13　まとめ　雑誌の伝説化について……『新青年』
14　試験（小論文）	14　試験（小論文）
15　総括学習	15　総括学習

ような実体的なメディアをつくることが、すべて無意味だと考えているのではまったくない。実際に物をつくることの愉しさはあるし、表現やリテラシーを習得する手段、アウトプットとして本づくりは有効だろう。主体的な作業が手元に残るので、学生の満足度も高い。実際に、目的をもった活動の媒体や成果として、すばらしいものをつくる学生はたくさんいる。もしくは、クリティカルに新しいメディアを創造する意図で取り組むのなら、可能性はいくらでも開かれていると思う。

しかし、「出版論」「雑誌論」のような既存の産業に準じた枠組みで、職業幻想を学生に抱かせるプログラムには疑問がある。授業で教える程度のことは、いうまでもなく社会では通用しないし、むしろ変な自信をつけさせてしまうおそれもある。「出版に興味がある」という学生の多くは、雑誌をつくるどころか自分で買うことすらなく、ドラマに出てくるような華やかなイメージに、漠然と憧れているにすぎない。中には例外もあるが、そうした才能と意欲のある若者なら、とうに教室の外で何らかの媒体をつくって発信しているだろう。

出版変革期の証言者になる！

では、大学においてはどのような出版教育が可能なのか。

二一世紀における出版の焦点は、デジタル化である。その意味するところは、業界の危機でもアナログからの単純

な置き換えでもなく、この大きな転換期の中で「出版」の概念をいかに再構築するかである。教育の柱もまた、そこに至るパースペクティブに置かれる必要があるが、以下、たたき台として筆者の取り組みを報告したい。

「出版論」の授業は、現代を扱う前期、近代史プラス理論紹介の後期をそれぞれをセメスターで受講できるが、内容は連動している。

前提となる出版産業の特徴と構造は、前期の三〜四回をかけて丁寧に説明している。たとえば委託制度に関しては、書店に並ぶ本を①新刊、②既刊・注文、③既刊・その他、の三種類に分けるところからひととおり説明したのち、星野渉氏が『ジャーナリズム』二〇〇九年四月号に寄稿した「『委託販売』から『買い切り』へ　本の流通を変える様々な動き」を総括として読ませる。返品と責任販売制が、業界問題から個々の取引問題に移行し、さらに業界の外側（アマゾン）からのアプローチが加わる、という図式が明快な論考なので、実際に図にして示せば、複雑な問題でもじゅうぶん理解させることが可能だ。

出版社―取次―書店が構成する業界構造の相対化は、電子出版をあつかう際の重要な布石である。電子出版の範囲は諸説あろうが、筆者は二〇〇九年のグーグル和解問題が決定的な分岐点と考えているので、課金されていない電子コンテンツや、デジタル・アーカイブも当然ながら射程に入る。学生たちは意外に保守的で、電子ブックリーダーやタブレットで読む「いわゆる電子書籍」の評判はすこぶる悪いが、青空文庫やケータイ小説、さらにはピクシブなどの投稿型プラットフォームを例示すると、一八〇度反応が変わる。自分とは関係がないと思っていた電子出版がすでに日常に入り込んでいたことや、コンテンツ投稿サイトと同人誌市場との接続に気づくからだ。そこで、ばらばらに存在していた事象が「出版」という大きな構造として見えてくればしめたものだ。

「あなた方は出版のデジタルシフトという、グーテンベルク以来の大変革期に、二〇歳前後で立ち会う人々である。だから、いずれは講義を聴いているあなた自身が歴史の証人になり、それがどんな変化であったかを次の世代に伝えなければならない」というのは、この場面で毎度繰り出す決めぜりふなのだが、かなりの確率で手応えがある。

図書館や書店の変化を捉えておくことも不可欠だろう。今年度の授業では、あらかじめ「書店か図書館を訪問してA4一枚のレポートを書く」という課題を出しておいたところ、九二名から提出があり、書店数は七五となった。ざっと集計すると、

大手全国チェーン（紀伊國屋書店など）　19
複合型チェーン（CCC、VVなど）　18
リージョナルチェーン（くまざわ書店、オリオン書房、あゆみブックスなど）　23
流通系（未来屋）　2

エキナカ書店（ブックエキスプレスなど）　8
単店舗（恭文堂、往来堂など）　8
同新タイプ（かもめブックスなど）　7
海外、専門書店（誠品書店、サンパウロなど）　各2
図書館、ブックオフ　各1

といった分布である。チェーン店でもエキナカに数えたものもあり、分類は大まかではあるが、最も多かったのが代官山・二子玉川・六本木などの蔦屋書店で、地方のFCまで含むと一六店舗となり、二位の紀伊國屋を凌ぐ。単店では代官山T-SITEに次いで、丸の内リーディングスタイルが四票を獲得した。チェーンの中にも、有隣堂STORY STORY、成城コルティ内の三省堂書店など、雑貨を複合したタイプの店がいくつか含まれている。ちなみに、今年度のクラスで、松丸本舗を知る者はゼロであるが、受講者のほとんどは、開店時に中学生だったことが大きいとみられる。東京に偏るのはやむを得ないとして、ある種の定点観測にはなりそうなので、しばらく書店レポートは継続する予定である。

「終わり」の時代の雑誌論

雑誌論のほうは、よりコンテンツにブレイクダウンした内容で構成している（雑誌論という科目は二〇一三年度に廃止されたので、半期分のみを大衆文化論として継続）。

初回のイントロダクションでは、まず講師自身が定期購読していた雑誌を年代ごとに紹介する。『少女コミック』『週刊朝日』『月刊ポエム』『ぴあ』『アドリブ』『ビックリハウス』『本の雑誌』『朝日ジャーナル』『マリ・クレール』『東京人』『本とコンピュータ』『波』『東京かわら版』といった具合で、学生は初めて聞く雑誌ばかりだが、「ことぶき通り商店街の本屋さんから届けてもらっていた」「中二病だった」「ファッション誌なのに文芸作品が充実していた」など、講師の自己紹介ついでに、雑誌と背景のバリエーションをざっと総覧させる目的がある。

続いて、雑誌ビジネスの現状を示す。周知のとおり売上

遠読
〈世界文学システム〉への挑戦
モレッティ　世界文学は正典の精読だけで語れるのか。古今の作品をデータ的に解析する21世紀の文学研究。**秋草他訳 ¥4600**

奴隷船の歴史
レディカー　資本主義興隆の根にあった大量強制移住。その暴力と恐怖、抵抗と反乱を描く黒い大西洋史。**上野直子訳 ¥6800**

なぜ近代は繁栄したのか
草の根が生みだすイノベーション
フェルプス　個人主義対コーポラティズム。ノーベル経済学賞受賞者が近代的繁栄の源泉を文化転換に探究。**小坂恵理訳¥5600**

料理と帝国
食文化の世界史
紀元前2万年から現代まで
ローダン　大国の興亡、宗教の興隆と食の関係を壮大なスケールで辿る。**ラッセル秀子訳¥6800**

昆虫の哲学
ドルーアン　人間と昆虫の深くて奇妙な関係を、古代から現代思想まで多角的に考察する科学哲学エッセー。**辻 由美訳 ¥3600**

京城のモダンガール
消費・労働・女性から見た植民地近代
徐智瑛（ソ・ジヨン）　植民都市ソウルを闊歩、日本の紡績工場や炭鉱町にも流れでた女たち。忘れられた声が明かす近代史。**姜・高橋訳 ¥4600**

科学の曲がり角
ニールス・ボーア研究所　ロックフェラー財団　核物理学の誕生
オーセルー　研究機関が経済援助を受けるとどうなるか。その起源を考察。**矢崎裕二訳 ¥8200**

msz
東京文京本郷5丁目32-21　みすず書房
tel. 3814-0131 fax 3818-6435（税別）
http://www.msz.co.jp

の減少は深刻であり、電子化や新たな広告モデルの検討は加速している。「雑誌は死んだ、終わった」というネガティブな記事も少なくない。このように、「雑誌に興味があるつもり」で受講した学生に対して、

・世の中には自分たちが知らない「雑誌」が多数存在すること

・雑誌業界がかなり厳しいらしい（よく考えれば、自分もあまり雑誌を買っていない）こと

を自覚させるところから一三回の講義は始まるが、何も雑誌を「オワコン」扱いするのが目的ではないし、「生き残り策」を検討するのでもない。めざしたいのは、雑誌というメディアが果たしてきた役割や意味を考え、問い直す姿勢なのである。もし雑誌が本当に「死んだ」のなら、それが「生きていた」とき人はどのようにそれに接していたのか。そのとき雑誌は、社会のなかでどのようなコミュニケーションを可能にしていたのか。過去の雑誌を素材にする場合、ともすれば世代的なノスタルジーに陥りがちであるが、研究対象として構造化できれば、現在のメディア状況を重ねてアクチュアリティを付与することができる。

とはいえ、筆者自身が雑誌研究をいくつもこなしているわけではないので、講義は先行研究を検討して紹介するケースが多い。現行のカリキュラムで、自分の研究成果を直接に用いているのは『思想の科学』一誌である。以前にも触れたことがあるが（拙稿「集団的機構としての雑誌」吉見俊哉編『文化社会学の条件―二〇世紀日本の知識人と大衆』日本図書センター、二〇一四）、日本の雑誌研究は、編集者や出版者に寄っていたため、雑誌自体の構造分析はまだ日が浅い。とりあげたいがまとまった研究が出ていないものについては、切り口の工夫が必要である。

たとえば『平凡パンチ』の場合は、伝説の雑誌であると同時にその懐古の膨大さから「言説の雑誌」であると定義し、その言説がどのような構造から成立しているのか、を通して、当時の編集部・関係者・出入りする学生などの予備軍・何層かにわたる読者を描きだしてみた。同時に、それらの言説に現れるカレッジ文化、進駐軍文化の二つのアメリカを、パンチの理想である「パンチ野郎」の表象にきわめて近い同時代のスター、加山雄三（若大将シリーズ）と石原裕次郎（太陽の季節、狂った果実）から解読することも試みている。

ひとつひとつの雑誌・回にはそれぞれテーマがつけられているが、講義全体としても、雑誌を見る上での基本的構造と要素（論壇、文学、グラフィズム）、商業資本による大衆雑誌（『平凡』からファッション誌まで）、若者が自分たちでつくりだすミニコミ的な雑誌（『思想の科学』から『ぴあ』まで）というブロックに分けることで、議論の展開を期待している。最終回の『ぴあ』であれば、学生が始めた小さな情報誌という、そこまでのミニコミの流れをくみながら、投稿・人気投票・自主制作の発表と支援、オフ会という流

れにおいて、受け手と作り手を雑誌が媒介して育てる七〇年代的なサブカルチャーの様相に言及する。しかしいっぽうで、羅列されるフラットな情報に赤丸をつけることで、人々がそれぞれの理念的な都市を仮構し、消費するという細川周平らの議論を紹介しつつ、そこのみが実体化した現代の問題意識につなげる。

講義では古い雑誌も回覧しており、反応はよい。リアクションペーパーで、授業でとりあげた雑誌を本屋で見てみた、親と話して盛り上がった、という感想がしばしばみられるのは嬉しい効果といえるだろう。

出版研究と教育

大学の出版教育に関する問題のありかは、ひとつはアカデミズムと実務の問題であり、今ひとつは学生の知識・イメージと現実とのギャップである。

前者は、日本出版学会が設立当初から議論してきたテーマだが、本誌第一〇六号でも特集された、文系学部廃止問題と重ねて論じることが可能だろう。同号の巻頭で本田由紀氏もとりあげた、吉見俊哉『「文系学廃止」の衝撃』（集英社新書）は、長期的な価値を創造する知として「文系の知」の有用性を論じているが、大学での出版教育は、出版界にとってまさにこうした知を育てる場所でなくてはならない。同書でも指摘されているように、とりわけ日本の近代において、こうした知の基盤として機能したのが出版産業であったことは、ここで改めて強調しておく必要があるだろう。

後者のギャップに関しては、まず現実を教え、多くの事例を示すことでまだらの知識を叩き、リアクションには懇切に応えることしかない。その繰り返しから、出版を対象化し、批判的にとらえる知が生まれる。出版産業がいかに低調といっても、多くの若者たちが出版に興味や憧れを持っている。大学で出版を教える意味は、そうした若者に新しいパースペクティブへの道筋を示すところにある。それは、未来の「出版」の担い手を育てることにほかならない。

藤原書店

別冊『環』21
ウッドファースト！
建築に木を使い、日本の山を生かす
上田篤編 尾島俊雄／田中淳夫／中村桂子／伊東豊雄ほか 3800円

別冊『環』22
ジェイン・ジェイコブズの世界
1916-2006
塩沢由典他編 片山善博／槇文彦ほか 都市思想の変革者。3600円

「大正」を読み直す
幸徳・大杉・河上・津田、そして和辻・大川
子安宣邦 戦争へとつながる国家権力の暴走が、大正期に既に兆していたことを明かす。 3000円

古代史研究七十年の背景
上田正昭 上田史学の内実。自らの人生の足どりを、研究生活七十年を経てたどり直す小文集。渾身の書き下ろし遺作。 1800円

多田富雄のコスモロジー
科学と詩学の統合をめざして
多田富雄ほか 生命・科学・美を架橋した免疫学者。今秋発刊のコレクション、プレ企画。 2200円

心に刺青をするように
吉増剛造 前衛詩人が、〈言葉—イメージ—音〉の錯綜する世界を全身で受けとめ、新しい表現に果敢に挑戦！ 4200円

自分を信じて
佐藤初女・朴才暎「一緒に食べる？」食は私の原点——〈森のイスキア〉の活動で知られる初女さんの最後の言葉。 1800円

月刊 機 B6変32頁 6月号 №291
石崎晴己／岡田英弘／大田昌秀／渡辺純／松浦玲／田中克彦／中西進／中村桂子／三砂ちづる／尾形明子／川満信一ほか
年間購読料2000円（送料込） ◎見本誌・ブックガイド呈 ＊表示価格税抜
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523
振替 00160-4-17013 TEL 03-5272-0301
ホームページ http://www.fujiwara-shoten.co.jp/

喩えれば登山——書店員教育の(不)可能性について

福嶋聡（ジュンク堂書店難波店店長）

社内教育はありえない

「四月の声を聞くと、毎年問題になるのが、新入社員教育である。そして、既存の社員の教育についても、改めて問い直される。毎年問題になるのは、取りも直さず結局これと言ったカリキュラムが出来上がらないためである。」（拙著『書店人のしごと』三一書房　一九九一年）

四半世紀が経った今も、この状況は、まったく変わっていない。教育一般の混乱、混迷とともに、更に答えのない問題となっているかもしれない。

すぐ後にぼくは、次のように書いている。

「実をいうと、最近ぼくは、社内教育というものの有効性、可能性そのものに、疑問をもっている。」

この一文を書いた時、ぼくの疑問の矛先は、主に「社内」教育に向かっていた。どんなに開放的で自由な社風の会社でも、「社内」に満足し、「社内」にこだわって外に出ていこうとしなければ、自社とは違う価値観や方法論と出会わなければ、個人にも会社にも進歩はない。

だから、ぼくは、自分自身の教育のためにも、どんどん外へ出て行った。同業他社の諸先輩、ライバル、出版社の人たちと語り、学び、議論した。その場に後輩たちを連れて行き、議論の場に立ち合わせる。時に、意見を求める。「社内」では当たり前であったことが、当たり前でなくなる。「当たり前でない」ということは、間違っているということではない。価値観を宙吊りにすることは、その価値観を否定することではない。却って、元の価値観を強化することもある。

そうした経験は、ぼく自身を鍛えてくれたし、確かに後輩たちの教育にもなったと思う。何よりも、「負けてなるものか」という意欲を、自分自身にも後輩たちにも醸成す

ることが出来た。早い時期から、ぼくにとって、教育は「社内」教育ではありえなかったのだ。

だがやがて、「教育」そのものの可能性への疑問が、ぼくの中でどんどん頭をもたげてきた。いつまでたっても、「これといったカリキュラム」は出来上がらない。作成の端緒にさえつけない。書店現場の仕事では、こと商品知識については、カリキュラムの作成に不可欠な到達目標がないからである。これこれこれだけの知識を獲れば次のステージに進めるという里程標がないのだ。毎日二〇〇点もの新刊が出て、時々のベストセラーはめまぐるしく替わっていく。そして多様な出版物の内容は、世界の森羅万象すべてに関わる。店頭でのお客様からの問い合わせも、どこから何が飛んで来るかわからない。

だとすれば、めまぐるしく変わる商品内容についての知識を貪欲に摂取していく姿勢こそが、教えるべき最大の、ひょっとしたら唯一のこととなる。これだけ覚えれば、これだけ知れば一人前という里程標は存在しない代わりに、いかなる知識も、結果的に仕事の質を上昇させるのだ。「何でも知ってやろう」という旺盛な知識欲こそ、書店員にとって最大の武器となる。

だが、そうした姿勢を、欲望を、「教育」することなど出来るのだろうか？

ぼくは、自分自身が興味を持った本を広く貪欲に読んでいき、得られた知識によって棚をつくり、色々な人に知り合って、更に多くを教わりながらブックフェアやトークイベントなどを開催し続けた。部下や後輩に、ああしろこうしろとはいわない。自分で関心を持ってくれなければ、意味がないからだ。ぼくは、広く深く関心を持って商品と対峙することがとても面白く楽しいのだということを、身を持って示すしかなかった。

そのことを通じてぼくが部下や後輩に望んだことは、決してぼくと同じことをすることではなかった。ぼくが楽しんでいることを知り、自分もまた楽しみたいと思ってくれることだった。楽しむ内容は、楽しむ仕方はそれぞれ違っていて構わない。否、違っていないと面白くない。「こういうことがしてみたいのです」といってくれた時、それがぼくの知らない世界であればあるほど、ぼくも面白いのだ。先行して楽しんでいる者として、経験によって得られたノウハウを駆使して「してみたいこと」を現実化すること、それがぼくの「教育」だった。

内弟子制度

ああしろこうしろと指示はしない。自分がやっていることを細々と説明したりもしない。普段は共に忙しく書店の業務に奔走している。教える側は自らの仕事を見せるだけ。そばに付き従い仕事を手伝う者は、伝統芸能における内弟子に似ている。内弟子は、朝から晩まで師匠の身の回りの世話に忙しく、時間を割いて何かを教えてもらうというこ

とがない。むしろ通い弟子のほうが、決められた時間にキチンと師匠からノウハウを伝授してもらっている。だが、やがて師匠の跡を継いでいくのは、たいてい住み込みの内弟子の方である。世話になったご褒美とか、一緒に住んでいて情が移るためではない。師匠と生活を共にしているうちに、知らず知らずのうちに「師匠の思い」が内弟子に伝わる、しみ込んでいくからである。

伝統芸能の「内弟子制度」については、東北大学の渡部信一にユニークな研究がある。

認知科学の立場から三〇年以上にわたり「人間の学び」を研究してきた渡部は、3DCGなどを活用して伝統芸能の保存・継承（教育）を支援しながら、伝統芸能の世界に数百年にわたって続く「教える—学ぶ」という関係性の本質を探求してきた。そして、そこで継承されているのが、「きちんとした知」ではなく「よいかげんな知」であり、だからこそ伝統芸能は時代や環境の変化に耐えながら存続してきたと結論した。（『超デジタル時代の学び—よいかげんな知の復権をめざして』渡部信一　新曜社　二〇一二年）

渡部が光を当てた伝統芸能の世界の「よいかげんな知」は、複雑で曖昧、状況の影響下にある現実を「複雑なまま」捉え、扱おうとする。それは、「複雑なものを要素に分解し単純化」し誰にも明晰判明になった「きちんとした知」を、順を追って系統立てて教えようとする近代教育の対極にある。「きちんとした知」は、カリキュラム化しやすく、誰にでも学びやすいし、それゆえ教えやすい。加えて、二値論理を基礎とするIT技術にも馴染みやすい。

しかしながら、「きちんとした知」からは、複雑なもの、曖昧なもの、そして我々を囲む環境など、多くのものが剥ぎ取られている。目に見えるもの、言葉にできるものだけを複写しても、芸は継承できない。形だけを真似ても師匠と同じにはなれず、一挙手一投足まで一致しても、芸を継承したことにはならない。演じる環境・状況が変化した時にやはり師匠が演じるであろう芸でなければならない。

師匠なら、変化した環境・状況下で芸の本質が変わらないように、演じ方を変化させるであろう。そうして初めて、観客は「いつもの師匠だ」という印象を持つ。そこまで師匠と同じように出来て初めて、「芸を継承した」といえるのだ。そのために最も大事なことは、「師匠の思い」を継承することだ。それは、仕事も生活も、出来るだけ師匠と共にし、常にその傍に寄り添っていることによってしか、叶わない。だから、「内弟子制度」なのである。

渡部は、著しく処理能力が上がり、対象のみならず文脈や状況までも扱うことができるようになったコンピュータで、伝統芸能の継承に寄与する実践を続けてきた。もともと黒か白かの二値論理で動き「きちんとした知」にこそ強いコンピュータが、複雑に発展進化したことによって、それとは真逆の「よいかげんな知」の支援にまで至ったのが、面白い。コンピュータの内破的進化？

さまざまな環境・状況下で「芸」を見せることは、書店員にとっても重要だ。書店員の仕事は、書店に訪れるさまざまなお客様の要望に応え、本を販売することによってお客様の満足を得ることだからである。書店員にとっての「環境」は、自分が勤める書店、更にはその書店が立地している地域、もっと広げて時代の読書環境かもしれない。「状況」は、訪れるお客様一人ひとりの要望、志向である。

その仕事において成果を得るためには、知識だけでは十分ではない。お客様の要望を的確に察知し、その時々の環境で最善の答を速やかに発見し、お伝えし、本の購入に結びつけること、一言でいえば「コミュニケーション能力」が求められる。お客様が求めている本一冊を見つけて提供するという単純な作業にも、この能力は不可欠である。

知識・技能からコンピテンシーへ

「コミュニケーション能力」が重要なのは書店業に限ったことではなく、すべてのビジネスに共通する。世界の経済界も既にそのことに気づいていると、渡部はいう。(『成熟社会の大学教育』渡部信一　ナカニシヤ出版　二〇一六年)。

ＯＥＣＤ(経済協力機構)が二〇〇〇年から実施し、日本もその結果に強い関心を示している(一喜一憂している)ＰＩＳＡ(国際的学習到達度調査)が、そのことを証している。ＰＩＳＡが重視する能力は、これまで中心とされてきた知識やスキル(技能)などの認知的な能力に加え、対人関係的な能力や人格特性・態度なども含む人間の全体的な能力＝「コンピテンシー」である。

渡部は、そのことを基本的には支持しながら、性格的・身体的な「特性」や「動機」など、いわばこれまで「氷山の海面下に隠れていた部分」であるコンピテンシーを抽出し尺度化して有用な人材の発掘を目論むＯＥＣＤ的発想には、異を唱える。そうした姿勢は、「弱い態度をとる能力」や「肩の力を抜く能力」を要素に分割して抽出しようとして、本来そうした作業に馴染まないそれらの能力を台無しにしてしまうからだ。そして、「客観的な評価」に拘ることによって、行為を行うなかでその都度その都度(アドホックに)瞬時に行われるまさに「行為のなかの振り返り」を見逃してしまうからだ。それらこそ、師匠の芸が環境・状況の変化に揺るがない為の「奥義」であるのに。

だが、そうした能力は先天的に与えられる部分が大きく、個人の努力が評価に反映されない、即ち教育の余地がないものではないのか？　貴族主義的な階層固定を結果するものではないのか？

ぼくは、そうは思わない。確かにそうしたコンピテンシーを直接注入する教育的方法論はないかもしれない。しかし、そうしたコンピテンシーの醸成に寄与する教育はありえるのであり、それこそ、一旦は否定された知識の教育であるとぼくは思う。即ち、それ自体が目的化した知識の教育ではなく、個々人のコンピテンシーの育成の発火装置、

触媒となるような知識の教育である、と。

そうした教育によって伝授される知識は、すぐさま実践に役立つ知識ではないかもしれない。だがそれは、もっと深く広く知っていきたいという意欲を高める知識である。

触媒としての知の復権

書店員教育であれば、出版史、出版流通史や、再販制の歴史や意義の知識。それらは、明日の書店現場の実践にはすぐに役立つものではないかもしれない。だが、みずからが携わる産業の根本の知識は、必ずや仕事に対する矜持を与え、日々の仕事の「コンピテンシー」を高めてくれる、とぼくは信じる。

いくつもの取次会社を統合して昭和一六年に設立された国策会社日配（日本出版配給株式会社）について学ぶことは、戦時中の当局が何よりも出版物を恐れ統制しようとした事実を知り、書店で働くことに誇りを与えてくれるかもしれない。

職場でも、「より実践的ですぐに役に立つ教育を」というありがちな声に抗して、再販制について新入社員に講義したことがある。その講義は、確かに次の日の仕事には役に立たなかったかもしれない。でもその年の新入社員は、多くが長く会社に残り、やがて大きな戦力へと育っていった。コンピテンシーを進化させる触媒となる知識こそ教材であり、そうした知識を得ようとする意欲と姿勢こそ、教える相手に与えたいコンピテンシーなのである。

本来ＩＴ技術は、人間の知の量的並びに質的向上に資するべく開発されてきたものの筈だが、現実にはそれを阻害する大きな要因となってしまっている。

まず、複雑化の一途を辿るＩＴ技術を習得するために少なからぬ時間が割かれなければならず、そのことが他の知識の習得（それが元々ＩＴ技術開発の目的だった筈だ）の時間を壊滅的に侵食していること。「すぐに役立つ知」は、そうでない知を容易に駆逐してしまうのだ。

更に問題なのが、ネットにアクセスすれば何でもわかるのだから、無理に多くの知識を記憶する必要はないという「イデオロギー」が蔓延してしまっていること。知らないこと、わからないことは都度「ググったら」よい、というわけだ。

そう信じる人は、次のエピソードを知ってほしい。

『プルーストとイカ　読書は脳をどのように変えるのか？』（インターシフト　二〇〇八年）の著者メアリアン・ウルフが、「どうやってそんなにたくさんの詩やジョークを覚えられたの？」と尋ねた時、彼女のこどもたちの八六歳になるユダヤ系の祖母ロッテはこう答えた。「いつか強制収容所に入れられても、誰にも取り上げられないものが何か欲しいとずっと思ってたのよ」。

或いは、最新兵器を謳うＳＦ映画大作の主人公も、クライマックスでは大抵素手で闘っていることを思い出してほ

しい。頼りになるのは最新兵器の使用マニュアルではなく、試練と鍛錬を経て獲得した「わざ」なのである。

喩えれば、登山

矜持と「わざ」を進化させる触媒となる知識、それは別に出版・書店業と関連したものである必要はない。どのような知識も、それを得てわがものにする作業の中で、それぞれのコンピテンシーを確実に高めてくれるからだ。そして、我々の職場は、そのための材料には事欠かない。書店店頭は、広く深い知の海なのだ。その中から、自分が楽しくなれそうな知を択んだらいい。

書店員はたまたま自分が担当したジャンルで毎日触っている本たちに愛着を覚えるようになることが多い。それまで全く関心がなかったことに興味が湧いてくる。それでいいのだ（勿論、自ジャンルに拘る必要は全くない）。

喩えれば、登山であろうか。

ある山をこれと思い定め、一歩一歩登っていく。その足取りの原動力は、もちろんその山の頂を目指す意志である。だが登山の本当の醍醐味は、山頂に達した時に、あるいは中途において思いもかけず、周囲に広がる山脈（やまなみ）を目にすることではないだろうか。どの山の頂が最も高いか、自らが目指す頂の標高がどのあたりの順位にあるかは、問題ではない。多くの頂の奏でる交響こそが、感動と喜びを与えてくれる。

ただし、そうした光景を目にすることができたのは、一つの頂を目指して登り続けてきたからこそである。書店人は、あるジャンル、時にたった一人の著者にこだわり、それに精通しようと努力を重ねることによって、書物の世界全体の広大な眺めを、見晴るかすことができる高台に辿りつくことができるのだ。

教える者は、学ぶ者のほんの数歩先を歩いているだけかもしれない。そして自身が前進し続けないことには、即ち学び続けないことには、決して学ぶ者に何かを教えることなど、できないのである。

企業文化 改訂版
ダイバーシティと文化の仕組み
E.Hシャイン著／尾川丈一監訳・松本美央訳 ●定価3780円
■組織文化の核心に迫るため書かれた好評書の、国際化・IT活用の進展等を踏まえた新版。さまざまな工夫でより読みやすく編集。

事業承継のジレンマ
後継者の制約と自律のマネジメント
落合康裕著 ●定価3456円
■ファミリービジネスの研究テーマとして注目を集める、事業承継の企業変革と後継者育成について、4つの事例研究を元に追究。

流通イノベーションへの挑戦
田口冬樹著 ●定価3240円
■少子高齢化やICTの普及等という社会の変化に対応しつつ、社会を大きく変える存在でもある流通のあり方を様々な事例から探究。

製品開発と市場創造
技術の社会的形成アプローチによる探求
宮尾学著 ●定価4104円
■「技術の社会的形成アプローチ」を用い製品開発論とマーケティング論を架橋、コモディティ化を排す製品開発の実現へ理論化。

白桃書房
東京都千代田区外神田5-1-15
TEL03-3836-4781 FAX 03-3836-9370
http://www.hakutou.co.jp/（税込）

命の形 形の命

Lives of Form | Form of Lives / No. 08

地図記号はその形の象徴
地図は全宇宙を図化する方法

折りに触れて書きとめた私のデザインノートより

地図は芸術だ
地図は見て楽しい
色も形も意味がある
地表の表情を写し取り
その場所に行ってみたくなる

❶上下の場の移動

❷左右の場の移動

❸かたちの変化

❹大きさの変化

❺色に関する変動

❻きめに関する変動

❼濃淡に関する変動

❽方向に関する変動

『図の記号学』
地図とは空間を認識する方法
空間をどう捉えるか by Jacques Bertin

地図は凹凸の地球と地面の肌を描くこと

地図の中に見る
直線の道は
政治と権力の道
曲線の道は
動物と人の営みの道
直線の街は専制の街
曲線の街は民衆の街
街の大きさは
人間の欲望の大きさ

地図で使われている
緑は自然と安堵
赤は欲望と緊張
青は静寂
黄は荒廃
茶とグレーは無関心
黒は記号

地

宇宙のすみずみまで
旅の費用もいらず
疲れも知らず
暑さ、寒さ、飢え、渇き
不便も感じないで行ける
地図の中の旅
『Don Quijote』Miguel de Cervantes

図

地図はそい地球を平面にする図法

地層の表面だけを
図化するものではない
物と現象を図化する

地表には空気の層が見える
ほら、そこには人々が生活している
地表には風も吹く、雨も降る
川が流れ人が暮らす

超高層
都市は平面から立体へ
地表から地下へ
重層化されていく
地下街
地下鉄

Google とカーナビで
印刷された楽しい地図は
年々減ってきた
電子 Media の地図は
地図の楽しみを奪っている
目的地に迷わず
行けることだけの地図
ガソリンスタンドとコンビニと
信号が目立つ地図

地図は日に日に変化する
地表は生きている

『都市のイメージ』
都市の視覚的形態分析
by Kevin Lynch

Identity 環境のイメージ
Structure 環境の構造
Meaning 環境の意味

LandMark 目印
Path 道路
Edge 縁
District 地域
Node 接合点・集中点

中垣信夫｜グラフィックデザイナー
Nobuo NAKAGAKI｜GraphicDesigner

大学出版部ニュース

表示価格は税別です。

二〇一六年度定時社員総会の開催

五月二七日に神楽坂の日本出版クラブ会館で、協会の定時社員総会が開かれた。今回は、正会員として入会申し込みのあった早稲田大学出版部の協会加盟が満場一致で承認された。同出版部は一九六三年の協会設立時のメンバーで、〇八年に一度退会しており、いわば再入会のかたちになる。協会担当の上田康史氏は、再出発した出版部が協会の調査・研究・販売活動に参加することでさらなる可能性を見出したいと抱負を述べられた。

電子出版アンケートについての報告

今年初めに、二〇一五年の紙の出版物の推定販売額が一兆五二二〇億円で、一一年連続の減少になったと発表したのは出版科学研究所だが、同研究所は今回初めて電子出版についても調査して結果を公表した。それによると電子の市場規模は前年比三一・三％増の、一五〇二億円と推定され、額は小さいが伸び率は大きく、だんだんと無視できない規模に膨らみつつあると確認された。ちょうど同時期に協会では加盟出版部に対して電子出版アンケートを実施しており、このほどその集計がまとまった。

それによると二五出版部から回答が届き、現在までに電子書籍を発行しているのは一〇出版部であった。累計点数の多いほうから六九二点、二二〇点、一六〇点……と続き、一〇出版部の合計は一二三九点だった。配信先は電子図書館サービスと電子書店が主で、配信フォーマットはｅ－ｐｕｂ（固定→三出版部、リフロー→一出版部）、ＰＤＦ（七出版部）となっている。価格設定は、紙の本の約七割、紙本と同価格、電子図書館向けは紙本の約三倍だが個人向けは紙本と同価格などいろいろで、全体的には高めの価格設定の印象である。販売料率は六〇～七〇％が主流のようである。

電子出版における課題は「著作権の取り扱い方」「電子に移行する際の著者の意志や方向性の確認」「ＰＤＦデータで制作したものが電子書籍といえるのか。かといっていろいろな電子的機能を考えるのは経済的でないような気がする」「今後、電子のメリットが感じられる出版になりえるのか」「学術分野ではコンテンツが相当数増えてきているので、今後はそれを中核的なプラットフォームの中でどうつなげていくかが重要」「配信方法などの未標準と、専用端末の未普及」……等々、今回のアンケートからさまざまな事情を読み取ることができた。

北海道大学出版会

▼守川知子編著『**移動と交流の近世アジア史**』（A5判・三〇八頁・五二〇〇円）地域社会を越えた人々のダイナミックな動きを多様な一次資料を用いて描き出す。▼小澤実・長縄宣博編著『**北西ユーラシアの歴史空間―前近代ロシアと周辺世界**』（A5判・三四二頁・三六〇〇円）ロシアないしスラブの枠を越えた越境研究による新しい豊かな北西ユーラシア史像。▼溝口修平著『**ロシア連邦憲法体制の成立―重層的転換と制度選択の意図せざる帰結**』（A5判・二七四頁・五〇〇〇円）エリツィンはなぜ中央集権的な大統領制を制定しながら遠心的な連邦制を容認したのか。体制転換の重層性に着目し分析。▼瀬川高央著『**米ソ核軍縮交渉と日本外交―INF問題と西側の結束 一九八一―一九八七**』（A5判・五二二頁・七五〇〇円）米ソのINF交渉に対し中曽根内閣がとった外交政策を一次資料から検討。▼栗田啓子・松野尾裕・生垣琴絵編著『**日本における女性と経済学―一九一〇年代の黎明期から現代へ**』（A5判・三四八頁・五六〇〇円）女性に対する経済学教育の成立と女性経済学者の誕生の歴史。

弘前大学出版会

▼石井忠、石水毅、梅澤俊明、加藤陽治、岸本崇生、小西照子、松永俊朗編著『**植物細胞壁実験法**』（B5判・四〇四頁・五五〇〇円）植物細胞壁に関する最新の実験書である本書は基礎編と応用編の二部構成。第一線の研究者が、これから研究を始める人の立場に立って記述した本であり、植物科学・木質科学・資源科学などの分野の大学学部生や大学院生のための実験書として、また、研究者や技術者のためのマニュアルとして有用である。▼ルネ・H、デビッド・C・M／森本洋介（監訳）上松恵理子・斎藤俊則・中村純子・菅原真悟・村上郷子・和田正人（訳）『**メディア・リテラシー教育と出会う―小学生がデジタルメディアとポップカルチャーに向き合うために**』（B5判・二二二頁・二〇〇〇円）アメリカ合衆国の小学校における教育の現場で発見された多様な課題と問題点を体系化し、子供たちのためのデジタル・メディア・リテラシー教育の実践方法を提案する。本書の独自性は、我が国でのリテラシー教育の取り組みにとって、きわめて有益かつ新しい道標となるだろう。

東北大学出版会

▼圓山翠陵著『**みんなの熱科学―10分でわかる熱とエネルギーの話**』（A5判・一四六頁・一五〇〇円）普段の生活の中であまり気づかない、身の回りにある「熱」にかかわる現象。熱は実在の物体として目で見ることはできず、とらえどころないとも言える。半熟玉子と温泉玉子、ペットボトルロケットから地熱発電、メタンハイドレードまで、熱とエネルギーに関する様々なトピックを軽快な筆致のエッセーで学ぶ。▼佐藤源之・金田明大・高橋一徳編『**東北アジア学術読本6　地中レーダーを応用した遺跡探査―GPRの原理と利用**』（四六判・二〇二頁・二五〇〇円）地中レーダー（GPR）は、遺跡調査において有効な活用が望める技術である。「発掘による遺跡の破壊防止」「遺跡の分布範囲の予測」「発掘できない遺跡を精密に可視化」など、その技術導入によって得られる成果は大きい。工学的原理の解説から、タイプ別のレーダー計測の具体的説明、実際の遺跡調査を実例とした応用の技術まで、GPRがもたらす遺跡探査への効果を紹介する。

流通経済大学出版会

▼ディヴィッドK・ヘイズ、アリッシャA・ミラー著／中谷秀樹訳『**レベニュー・マネージメント概論―ホスピタリティー産業の経営理念**』（B5判・五〇四頁・二七〇〇円）本書は『ホスピタリティー産業のレベニュー・マネージメント』（二〇一四年一〇月刊行）の改訂版である。

レベニュー・マネージメントとは、ホスピタリティー産業特有の供給制限を伴う限りある商品やサービスを最適な顧客に、最適な場所とタイミングで提供するための価格設定と売上の最適化戦略である。独立した新しい学問の一分野で、一九七八年のアメリカ航空規制緩和法施行後、一九八〇年代に航空会社が発明したイールド・マネージメントに始まり、一九九〇年代からホテルの価格設定に取り入れられ、二一世紀に入り、供給制限と在庫の消滅性を伴う商品やサービスを取り扱う産業全般で発展している。顧客中心主義がその根本理念である。

少子高齢化の進む我が国が観光立国を目指す中、基幹となるホスピタリティー産業において、海外の洗練された戦略を理解し、発展させることが肝要となる。

聖学院大学出版会

【近刊】

▼窪寺俊之編著『**スピリチュアルな存在として―人間観・価値観の問い直し**』〈スピリチュアルケアを学ぶ7〉（A5判・予価二三〇〇円）

シリーズ最終巻。実践に先立って必要なスピリチュアリティの観点からの人間観・価値観の問い直しを学ぶ。第Ⅰ部には、生と死を考える会名誉会長A・デーケン氏の「心のケアと癒やし」、精神保健福祉士田村綾子氏の「心身の病とたましいのケア」、生命倫理・生殖医療が専門のチャプレン関正勝氏の「押しつけられた価値観から自由に」、社会倫理が専門の阿久戸光晴氏の「二一世紀社会へのスピリチュアリティ論の貢献」の四講演を、第Ⅱ部には論考、田村綾子氏の「スピリチュアルケアの可能性」、窪寺俊之氏の「祈りのスピリチュアルケア」を収録。

▼***Establish the Dignity of Life***

Shu Matsumoto, Brian Byrd, eds.

A Theology of Japan: Monograph Series Vol.10（B5変形判・予価二五〇〇円）

「いのちの尊厳の確立」を主題とする「日韓神学シンポジウム2014」の講演ほか。

聖徳大学出版会

▼川並知子著／おりがみ制作『**こどもとつくる　おりがみえほん　あかずきんグリム童話**』（B5判ヨコ・四四頁・一五〇〇円）グリム童話でお馴染みの「あかずきん」の物語が、すべて折り紙で構成された素敵な絵本になりました。赤ずきんやおおかみといったお馴染みのキャラクターや、森のお花など、作品世界のすべてが折り紙で表現されています。巻末におり方が掲載されていますので、ただ読み聞かせるだけでなく、子どもと一緒につくって楽しむことができる一冊です。親子で一緒に手を動かしながら「あかずきん」の物語をつくりあげていくことで、お馴染みの童話の中に、新しい発見が見つかるかもしれません。

麗澤大学出版会

▼麗澤大学企業倫理研究センター監修『**企業倫理と社会の持続可能性**』（A5判・二八八頁・二六〇〇円）。日本企業における倫理観についての実証的研究成果を示し、次に徳倫理学等の企業倫理の新たな視点を提起し、さらに財務報告等の情報開示のあり方を検討する。そして持続可能な社会を念頭に環境問題・人権問題等をテーマに論究する。

▼C・キーザーズ著／立木教夫他訳『**共感脳―ミラーニューロンの発見と人間本性理解の転換**』（A5判・二六四頁・三二〇〇円）。ミラーニューロンの働きが運動システムだけでなく、感情システムや触覚システムでも成立していることが判明したことから、新たに「シェアードサーキット」という言葉を作り、従来の脳機能観の変更を提起する。脳科学の最前線における成果を読者に示す。

慶應義塾大学出版会

▼ティモシー・スナイダー著／池田年穂訳『**ブラックアース―ホロコーストの歴史と警告　上巻**』（四六判・三〇〇頁・二八〇〇円）前著『ブラッドランド』でホロコーストの歴史認識を根底から覆した気鋭の歴史家が、ヒトラー「生存圏」の思想に鋭いメスを入れ、ホロコーストの真因を明らかにする傑作。

▼ティモシー・スナイダー著／池田年穂訳『**ブラックアース―ホロコーストの歴史と警告　下巻**』（四六判・三六〇頁・三〇〇〇円）ホロコーストはドイツだけで起きたのか。強制収容所のみで為されたのか。加害者はすべてナチスだったのか。国家機構が破壊され、無法地帯に陥った地で一体何が起こったのか。極限状況における悪を問い直し、未来の大虐殺に警鐘を鳴らす世界的ベストセラー。

▼橘宗吾『**学術書の編集者**』（四六判・二二四頁・一八〇〇円）名古屋大学出版会の編集長として、数々の記念碑的な企画を世に送り出し、日本の学術書出版を牽引する著者が、編集・本造りの実際について縦横に語る、現役編集者必携、志望者必読のしなやかな鋼の如き編集論。

専修大学出版局

▼専修大学経営学部森本ゼミナール編『**大学生、限界集落へ行く　「情報システム」による南魚沼市辻又活性化プロジェクト**』（A5判・一九六頁・一五〇〇円）都会の学生が住民43人の限界集落に滞在、訪問を重ね、そこで見たもの、聞いたもの、感じたものを学生ならではの視点で綴る。また、特産のコメを使ったレシピ作りや商品開発に取り組むなど、辻又の「情報」を様々な形で発信する取り組みを紹介する。

▼三木由希子・山田健太編著『**社会科学研究叢書18　社会の「見える化」をどう実現するか　福島第一原発事故を教訓に**』（A5判・三三二頁・三四〇〇円）福島第一原発事故をめぐる「情報」を取り上げ、情報管理、社会制度、運用実態など、日本社会における「情報」をめぐる課題を「公開」と「秘密」二つのテーマで考える。

▼梶原勝美著『**ブランド発展史**』（A5判・三八八頁・四二〇〇円）ブランドの創造とその展開についての様々な事例を基にしたブランドの総合的発展史の研究書。

大正大学出版会

▼大正大学地域構想研究所編『**地域人**』（A4判・平均一四四頁・八一五円・毎月十日発売）「現代社会の最優先課題は、地域創生にある」をテーマに、地域の実態理解と再生の方法論をさまざまな視覚から紹介する地域情報満載の総合情報誌。

地域特集では、現地取材をもとに、物事を経済的視点だけから見るのではなく、多様な文化、歴史、暮らしに至るまでを掘り起すことを目指している。一方で、地域創生とは何かを豪華連載人による、人口、産業、食文化、リノベーション、ふるさとと信仰など、社会から心の問題まで幅広い提言を毎号掲載する。

第一〇号　地域特集―山形県／米沢市長「新たな産業の学術研究都市をめざし人材を確保する」／長井市長「〝天然水100％の子育て〟豊かな観光資源で選ばれるまちになる」／山形市長「山形市長が語るやまがたの今とこれから」ほか。

玉川大学出版部

▼秋道智彌・赤坂憲雄編『**〈フィールド科学の入口〉人間の営みを探る**』（A5判・二二四頁・二四〇〇円）マグロ漁のエサにこだわり、ナマコに狂い、廃村でガラス瓶や貝殻を拾う。あるいは、「のぐそ」を追い求める。フィールドワーカーたちの独特な嗅覚によって見出された調査・研究の実践報告を収める。

▼野本寛一著『**季節の民俗誌**』（四六判・四六八頁・四八〇〇円）あまり日のあたらなかった年中行事や、年中行事の体系のなかに入りにくかった季節にかかわる人びとの営みに光をあてる。特に雪国に注目し、土の匂い、潮の匂いが色濃くしみた「自然暦」や「多雪予測の兆象伝承」などに目を凝らす。

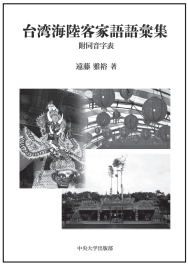
▼高槻成紀編／浅野文彦絵『**〈玉川百科こども博物誌〉動物のくらし**』（A4判・一六〇頁・四八〇〇円）リス、シカ、アユ、アオダイショウ、メダカ、ヒキガエル、ツバメなど、日本の野生動物十五種の生活を、「食べもの」「くらす場所」「移動」「子育て」の四つのテーマから解説する。玉川学園創立九〇周年記念出版。教育現場から発信するシリーズ第一弾。

中央大学出版部

▼細野助博・風見小三・保井美樹編著『**新コモンズ論**』（A5判・三〇〇頁・二五〇〇円）コモンズ活用の「社会実験」に関与する執筆者が、世に問う「新しいコモンズ創造」の実践テキスト。理論と実践を通じた公共政策の提言が満載。

▼第25回学術シンポジウム研究叢書編集委員会編『**東京・多摩地域の総合的研究**』（A5判・五六二頁・五六〇〇円）東京多摩地域の歴史、地方自治、地域振興、産業経済構造を多角的に考察し、領域的資本を捉え首都圏西部の国際的競争力の基盤を示す。

▼遠藤雅裕著『**台湾海陸客家語語彙集附同音字表**』（A5判・四五〇頁・四五〇〇円）台湾の海陸客家【はっか】語の現地調査による語彙集。項目は五九〇〇余、意味・場面別配列で、常用量詞・例文等も付した。



東京大学出版会

▼日本保育学会編『**保育学講座〈全5巻〉**』（A5判・平均三二〇頁・二八〇〇円）学問分野としての保育学の知見を系統的にとらえ、将来の展望を示す。『保育学とは（第1巻）』『保育を支えるしくみ（第2巻）』『保育のいとなみ（第3巻）』『保育を支える生きる（第4巻）』『保育を支えるネットワーク（第5巻）』の5本柱から、最新の学問的成果にもとづき現在の保育の課題の背景を構造的に読み解く。保育者養成や保育学研究者をはじめ、子育てにかかわり喫緊の社会的課題を考えるすべての方に。

▼斎藤毅・河東泰之・小林俊行編『**数学の現在〈全3巻〉**』（A5判・平均二二四頁・iとπ二八〇〇円／e三〇〇〇円）東京大学数学科の執筆陣が最先端の数学の研究を初学者に向けていきいきと紹介。代数、幾何、解析、応用という分野を軸に、テーマの近い講義ごと『数学の現在i』『数学の現在π』『数学の現在e』の三冊にまとめる。諸分野にまたがる数学の幅とそれぞれの奥行だけでなく、その一体としての有機的なつながりを実感しながら、広大な数学の世界を一望する。

東京電機大学出版局

▼小川鑛一・北村京子共著『**介護のためのボディメカニクス　力学原理を応用した身体負担の軽減**』（A5判・一九二頁・二七〇〇円）ボディメカニクスとは、力学原理を活用し、介護者の腰部などの身体負担を軽減する技術である。介助作業は、中腰の姿勢や、利用者を抱えて移動させるなど、身体に負担のかかる動作が多い。動作を毎日繰り返すことで、腰痛や腱鞘炎などを患いやすくなる。力学原理を理解し、正しい姿勢を意識して介助作業を行うことで、自分の身体を守り、利用者にとって安全な介護を提供することができる。本書は、介護を学習する人にとって理解がしにくい「力学」や「物理学」の基礎をやさしく解説。多くのイラスト・図面を用いて、身体負担を軽減する動作に応用されている力学原理を詳解。実際に自宅での介助シーンも取り上げ、介助動作とボディメカニクスとの関連・活用方法について紹介する。

法政大学出版局

▼G・アンダース『**核の脅威　原子力時代についての徹底的考察**』（四六判・三二二頁・三四〇〇円）広島、長崎、第五福竜丸、そして、福島。原子力の時代にわれわれは経験から何を考えるべきか。朝日新聞、読売新聞の書評欄で絶賛！

▼J・トーランド／三井礼子訳『**セリーナへの手紙　スピノザ駁論**』（四六判・三六四頁・四六〇〇円）書簡形式で書かれた五つの論考から成る。人々を縛る宗教的恐怖を打破する、唯物論的自然哲学の世界が、いま立ち現れる！

▼J・ハーバーマス／三島憲一ほか訳『**真理と正当化　哲学論文集**』（四六判・四七六頁・四八〇〇円）英米系の分析哲学と大陸系の政治哲学や社会哲学という大きな二つの流れが架橋可能であることを明快に示し、哲学の限界を超えて理論と実践の関係へ、新たな光をあてる。

▼H・ドレイファス＋Ch・テイラー／村田純一監訳『**実在論を立て直す**』（四六判・三〇四頁・三四〇〇円）重鎮二人が共同で哲学の根本問題に挑戦する記念碑的作品。自然と人間に関する実在論の理念を、多元的世界のなかで立て直す。

武蔵野大学出版会

▼ケネス田中編著『**仏教と気づき―「悟り」がわかるオムニバス仏教講座**』（四六判・一七六頁・予価一七〇〇円）「悟り（気づき）」とは何か？　武蔵野大学仏教文化研究所の教授陣が解説する、「悟り」を得るためのアプローチ方法。

▼佐藤佳弘著『**インターネットと人権侵害**』（A5判・二〇八頁・二〇〇〇円）インターネット上での誹謗中傷は、誰が書き込んだのかわからず、削除も簡単にはできない。現在、ネット上で起こっている人権侵害について、数多くの実例をもとにその対処方法を解説する。

▼阿部和穂著『**危険ドラッグ大全**』（A5判・二五六頁・二五〇〇円）危険ドラッグはなぜ生まれたのか？　危険ドラッグは脳にどう作用するのか？　危険ドラッグはなぜやめられないのか……？　薬学部の教授である薬の専門家が、危険ドラッグのすべてを豊富な図版で解説する。

武蔵野美術大学出版局

▼板東孝明編、深澤直人・板東孝明・香川征著『**ホスピタルギャラリー**』（四六判・二七二頁・二〇〇〇円）

「病院らしくない大学病院」を模索していた徳島大学病院長・香川征が武蔵野美術大学基礎デザイン学科と共同研究で生み出したのは、玄関ホールの小さなギャラリー。

デザインは、病院で何ができるのだろう？急患の家族に寄り添うような空間とは？入院患者が落ちつく場所とは？訪れる人が「良い病院」と感じる要素とは？こうした模索の上に提案されたギャラリーにはガラスケースが一台、ちょっと上等な深澤直人特製のソフト・ベンチ。

空間をつくるだけでなく、展示の企画運営は板東孝明が担当。ものと行為をとことん観察し、そこから新たなかたちを見出す授業「形態論」。その課題をギャラリーに持ち込むと、意外にも訪れる人々は美大生の作品に自らの心を重ね、作品と語り合っていることが「感想ノート」から浮かびあがってきた。

二〇〇八年から七年がかりの「美」と「医」コラボレーションの記録。

明星大学出版部

▼明星大学教職センター編『**教員を目指す君たちに受けさせたい面接試験対策講座―教員になる覚悟を持つ**』（A5判・二五〇頁・一九五〇円）自分はどんな教員になりたいのか。教員としての志を明確にする。面接試験に備え、挑み、自身を磨く。教育現場のエキスパートによる指南が満載。幼稚園教諭、保育士の面接試験対策も収録。「教員を目指す君たちに受けさせたい論作文講座」の姉妹書。

▼明星大学明星教育センター編著『**自立と体験1**』ポートフォリオ（A4判・九六頁・一六〇〇円）大学でいかに学び、自分の理想を見出すか。他者との関わりで自己理解を深め、卒業後を視野に大学生活をデザインする初年次教育全十五回のオリジナル教材。

▼樋口修資・吉冨芳正・林一夫共著『**教育の最新事情**』（A4判・一九八頁・二三〇〇円）

早稲田大学出版部

▼湯浅有希子著『**柔道整復師**』（A5判・二七四頁・四〇〇〇円）江戸時代から平成にかけての医療および医療制度の分析を通じて、明治以前の「接骨」から大正以降へ続く「柔道整復」への形成過程を明らかにする。柔道整復師の成立に大きな影響を与えた天神真楊流柔術の医学理論および同流柔術家による政治活動のほか、日本柔道整復師会の活動にも言及する。

▼日本平和学会編『**東アジアの平和の再創造〈平和研究第四十六号〉**』（A5判・一六四頁・二二〇〇円）新たな平和秩序の構想力。高まる国家間の緊張、跋扈する「ナショナリズム」、平和主義の退潮……。混迷の度を深める東アジアの平和をめぐる情勢。危機を俯瞰しつつ、平和を再創造するための新たなヴィジョンを示す――。

関東学院大学出版会

▼関東学院大学教育学部初等教育研究会編『**小学校教員をめざす人のために**』（B5判・一四四頁・一八〇〇円）小学校の先生になるには、いまや人間性はもちろん授業や学級経営力、こども理解や問題対応力まで多面的な資質が求められている。本書は、授業・学級づくりから問題や特別支援対応、また教育実習指導まで幅広い内容を扱い、これから小学校教員をめざす学生等に向け、多面でかつエッセンシャルな内容を網羅したものである。現代課題に関心ある現職教員向けに、また教員採用試験のためのテキストや教員養成課程の副教材としても、大いに役立つ書である。

▼宮下治著『**実践　理科教育法―子どもの「すごい！」を引き出す手作り授業**』（A5判・一六八頁・一八〇〇円）理科が大好きになっていく授業の実践事例と、理科授業方法のポイントを紹介する。

東海大学出版部

▼中嶋康裕編著『**貝のストーリー――「貝的生活」をめぐる7つの謎解き**』（A5変型判・二五二頁・二九〇〇円）海の宝石と呼ばれ人気の高いウミウシ、カタツムリやナメクジなどの陸の貝を中心に、頭足類以外の軟体動物の繁殖行動・社会行動を紹介する。

▼岡西政典著『**深海生物テヅルモヅルの謎を追え！―系統分類から進化を探る**』（B6判・三二四頁・二〇〇〇円）フィールドの生物学シリーズ⑳クモヒトデの仲間テヅルモヅルを解説したわが国唯一の本。系統分類学から分布の謎を紐解く。

▼岩手大学宮澤賢治センター編『**賢治学第3輯**』（A5判・二七四頁・一六〇〇円）二〇一四年から刊行する「賢治学」。第3輯の特集は「越境する賢治」。海外における賢治文学の受容の現状と今後の可能性についての論文をまとめる。

名古屋大学出版会

▼飯田祐子著『**彼女たちの文学―語りにくさと読まれること**』（A5判・三七六頁・五四〇〇円）女性作家は〈女性〉を代表しない。複数の読み手に応答するべく、亀裂の感覚を生きながら、彼女たちはいかに語ってきたのか。

▼ケンダル・ウォルトン著／田村均訳『**フィクションとは何か―ごっこ遊びと芸術**』（A5判・五一四頁・六四〇〇円）芸術作品から日常生活まで、虚構が私たちを魅了し、想像や行動を促す原理をトータルに解明するフィクション論の金字塔、待望の邦訳。

▼小池和男著『**「非正規労働」を考える―戦後労働史の視角から**』（四六判・二三八頁・三二〇〇円）終身雇用崩壊が叫ばれる以前から幅広く存在してきた非正規労働。「低賃金・使い捨て」では捉えきれないその合理性とは。

▼角谷快彦著『**介護市場の経済学―ヒューマン・サービス市場とは何か**』（A5判・二六六頁・五四〇〇円）日本の介護市場を国際的に位置づけて、低質なケアを排除するための介護市場モデルを包括的に描き出す。

三重大学出版会

▼三和元著『**日本のアルミニウム産業**』（A5判・三〇〇頁・六〇〇〇円）世界第3位だった日本のアルミニウム製錬業がわずか十年余の期間で衰退した激変の産業史・経営史。

▼内田淳正『**60歳からの成長**』（A5判・二八七頁・一三八〇円）自称髭禿学長の真心溢れる言行録。こんな学長が居たらいいな、と貴方も思います。

▼神山榮治著『**フランス初等教育史**』（A5判・八〇七頁・六四八〇円）ナポレオン革命後に始まるフランス初等教育の基礎作りを地域や教会まで俯瞰して詳述する。

▼鈴鹿医療科学大学編『**医療人の基礎知識**』（B5判・一六七頁・一〇〇〇円）いのちと医療の倫理・医療の基礎知識・社会の中の人と医療・チーム医療と他職種理解などの医学的解説書。

▼鈴鹿医療科学大学編『**医療人の底力実践**』（B5判・一三九頁・一〇〇〇円）介護・薬物・救命救急から敬語・マナー・メンタルヘルスまで実践的解説書。

京都大学学術出版会

▼太田至総編集『**アフリカ潜在力**』［全5巻］（A5判・平均三七〇頁・揃一九一〇〇円・分売可）テロと対立に揺らぐ現代、「不完全性を認める」アフリカの思想が世界を救う。◆各巻…松田素二・平野（野元）美佐編『**紛争をおさめる文化**』／遠藤貢編『**武力紛争を越える**』／高橋基樹・大山修一編『**開発と共生のはざまで**』／重田眞義・伊谷樹一編『**争わないための生業実践**』／山越言・目黒紀夫・佐藤哲編『**自然は誰のものか**』

▼エウリピデス／丹下和彦訳『**悲劇全集**』［全5巻］（西洋古典叢書・四六変型判・平均五二〇頁・揃二二九〇〇円・分売可）アイスキュロス、ソポクレスと併称されるアッティカ三大悲劇詩人の最年少者エウリピデスの現存する全作品を個人完訳。彼の作風は、特に情念や愛慾にとらわれた女性心理の鋭い分析と描写で定評がある。

▼猪原敬介著『**読書と言語能力―言葉の「用法」がもたらす学習効果**』（A5判・三〇六頁・三六〇〇円）読書のもつ教育的効果の実態とそのメカニズムに切り込む認知心理学最新の研究成果。

大阪経済法科大学出版部

今回は好評の既刊書を紹介します。

▼**『北東アジアの平和構築　緊張緩和と信頼構築ロードマップ』**（A5判・三〇〇頁・二五〇〇円）

本書は、信頼醸成に基づく恒久平和をいかにして構築するかについて統一的な提言を必ずしも行うものではないが、当該平和構築に関する重要なテーマを様々なアプローチにより考察している。本書が、今後さらなる争点となる、集団的自衛権行使容認等を含む安保法制整備、あるいは日本と中国・韓国との領土問題や歴史認識に関する問題を考える一助になれば幸いである。（はしがきより）

第1部　北東アジア情勢と平和構築の課題　北東アジアの構造変容と日本外交（豊下楢彦）他

第2部　平和と安全保障における自衛権論の検討　集団的自衛権と永世中立（澤野義一）他

第3部　市民による平和と人権の推進　信頼醸成のためのアクターとしての市民社会のネットワーク（梅田章二）他

大阪大学出版会

▼秋田茂・桃木至朗編著**『グローバルヒストリーと戦争』**（四六判・三五二頁・二三〇〇円）古代から現代までの戦争を、グローバル、リージョナル、ナショナル、ローカルの四層から鳥瞰。▼松浦成昭監修・南雲サチ子・森井英一編著**『実践細胞診テキスト　初心者からエキスパートまで』**（B5変型判・四一六頁・一〇〇〇円）質の高い細胞像で多数の症例を収録。細胞の形を決める分子メカニズムや病理学総論も平易に解説し、経験に基づく鑑別所見を多数掲載。細胞検査士がスキルアップしながら使えるフルカラーテキスト。▼志水宏吉・高田一宏編著**『マインド・ザ・ギャップ！―現代日本の学力格差とその克服』**（A5判・二六六頁・二八〇〇円）家庭環境に根差した格差の実態や格差克服の筋道を多面的に明らかにする。▼髙島幸次著**『奇想天外だから史実―天神伝承を読み解く』**（四六判・二一二頁・一八〇〇円）日本史上初めて人間を〈カミ〉に祀り上げた天神伝承をテキストとして、意外な史実を紡ぎ出し、その面白さを伝える。

関西大学出版部

▼弁護士法人あしのは法律事務所編著**『あなたは加害者？それとも被害者？』**（A5判・一一八頁・九〇〇円）種々の事例を通して、誰もが巻き込まれる可能性のあるトラブルから身を守る法律知識を、現役弁護士が大学生に向けて解説。飲酒、恋愛、インターネット、労働、破産、選挙活動など多様な分野を収録。

▼宇佐美幸彦著**『ビルダーボーゲンの研究』**（A5判・七九六頁・六五〇〇円）ビルダーボーゲンは一九世紀ドイツの大衆に普及した一枚絵の印刷物。ドイツ版の浮世絵・瓦版で、グラビア雑誌、アニメの原型となる。視覚・情報メディアの歴史的研究には不可欠な対象で、ドイツ大衆を歴史的に把握する貴重な史料である。

▼沈国威・内田慶市編著**『東アジア言語接触の研究』**（A5判・四四八頁・四〇〇〇円）近代の漢字新語、訳語の創出、普及に関する最新研究。翻訳論、文体論から漢字訳語の造語法、新漢語の語構成、「牛津」「恋愛」「難民」等の個別語誌まで多角度から分析し、近代語形成の諸問題を漢字文化圏での言語接触・語彙交流というバックグランドにおいて考察する。

関西学院大学出版会

▼関西学院大学災害復興制度研究所編『**災害ボランティアハンドブック**』（A5判・四四頁・五五〇円）
▼ガブリエレ　ハード著『**環境メディア・リテラシー―持続可能な社会へ向かって**』（B5判・一九八頁・二二〇〇円）
▼神余隆博編　KGりぶれっと40『**日本と国連―京都から世界平和を願って**』（A5判・一一六頁・一〇〇〇円）
▼杉浦司著『**戦略マネジメント―激動の時代を生き抜くためのスピード経営**』（A5判・一八八頁・二〇〇〇円）
▼齋藤由紀著『**電子黒板への招待―その提示力を生かした授業を考える**』（A5判・一〇四頁・一二〇〇円）
▼福井幸男著『**アメリカ大リーグにおけるイノベーションの系譜**』（A5判・二二八頁・三〇〇〇円）
▼松岡克尚著『**ソーシャルワークにおけるネットワーク概念とネットワーク・アプローチ**』（A5判・三六四頁・四〇〇〇円）

広島大学出版会

▼木原成一郎著『**体育授業の目標と評価**』（A5判・二五五頁・一三〇〇円）教師が体育の授業を改善しようとする時に求められる体育の目標と評価とはどのようなものか、授業研究の成果に基づいて提案する。体育授業で「指導と評価の一体化」をめざす教師必読の一冊。
▼於保幸正・海堀正博・平山恭之著『**地表の変化―風化・侵食・地形・土砂災害**』（B5判・一一〇頁・二一〇〇円）中国地方の地形や近年の土砂災害の特徴を俯瞰し、岩石の風化や侵食などがどのように地形の形成や災害と結びついているかを、歴史的な観点を含めて解説する。土砂災害に対して日常生活の中で何ができるのか、災害に備える上で示唆に富む一冊。
▼松本陽正著『**「異邦人」研究**』（A5判・二七六頁・二二〇〇円）アルベール・カミュ『異邦人』を緻密なテキスト読解や比較文学的アプローチなどの多様な角度から研究し、刊行後七十年余を経て醸成された解釈の定説に修正を迫る。一般読者に向けては小説の読み方の一例を示し、小説読解のワクワク感を提供する一冊。

九州大学出版会

▼福田昇八訳『**韻文訳　妖精の女王**』（A5判・（上）四二〇頁・（下）四三六頁・三〇〇〇円）原作はシェイクスピアと同時代に、詩人エドマンド・スペンサーによってエリザベス一世に捧げられた長編叙事詩で、質量ともに英文学の最高峰を誇る。アーサー王物語を題材に、妖精国女王の命を受けた遍歴の騎士たちが、貴婦人や魔女、魔術師、竜や怪獣などをめぐり数々の冒険を繰り広げ、それぞれの体現する徳の姿を示す寓意物語である。本書はこれまでに二度『妖精の女王』散文訳に携わった訳者の知見を生かし、従来の意味重視の散文訳とは異なり、原詩の韻律までも忠実に反映させた、日本の西洋叙事詩翻訳における初の試みである。朗誦に適した七五調による、理解しやすく美しい日本語訳。豪華装丁、函入り。
▼伊豆久『**金融危機と中央銀行**』（A5判・二三四頁・三八〇〇円）FRB、欧州中央銀行、日本銀行それぞれの金融危機対応策を比較検討。各中央銀行のバランスシートの変化に焦点を定め、通常時の金融調節方法と危機対応策におけるそれぞれの特徴を明らかにする。

一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

【50音順】2016年7月1日現在

㈱朝日新聞社	〒104-8011	東京都中央区築地5-3-2	TEL 03-5540-7749
亜細亜印刷㈱	〒380-0804	長野県長野市大字三輪荒屋1154	TEL 026-243-4858
㈱アベル社	〒162-0825	東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408	TEL 03-3235-1360
尼崎印刷㈱	〒661-0975	兵庫県尼崎市下坂部3-9-20	TEL 06-6494-1122
㈱ALE	〒103-0023	東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階	TEL 03-5652-8627
王子製紙㈱	〒104-0061	東京都中央区銀座4-7-5	TEL 03-3563-7072
岡本出版発送㈱	〒353-0001	埼玉県志木市上宗岡3-16-2	TEL 048-471-6291
カクタス・コミュニケーションズ㈱	〒101-0061	東京都千代田区三崎町2-4-1 TUG-Iビル4F	TEL 03-6261-2290
㈱加藤文明社印刷所	〒101-0061	東京都千代田区三崎町2-15-6 K-STAGE	TEL 03-3261-8281
城島印刷㈱	〒810-0012	福岡県福岡市中央区白金2-9-6	TEL 092-531-7102
㈱紀伊國屋書店	〒153-8504	東京都目黒区下目黒3-7-10	TEL 03-6910-0510
㈱クイックス	〒456-0004	愛知県名古屋市熱田区桜田町19-20	TEL 052-871-9190
㈱粂川印刷	〒112-0012	東京都文京区大塚6-9-7	TEL 03-3943-9811
㈱クリムゾンインタラクティブジャパン	〒101-0021	東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F	TEL 03-3525-8001
港北出版印刷㈱	〒150-0002	東京都渋谷区渋谷2-7-7	TEL 03-5466-2201
三松堂印刷㈱	〒101-0065	東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階	TEL 03-6823-5360
三美印刷㈱	〒116-0013	東京都荒川区西日暮里5-9-8	TEL 03-3803-3131
三立工芸㈱	〒101-0061	東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F	TEL 03-3261-5171
三和印刷㈱	〒381-2226	長野県長野市川中島町今井1822-1	TEL 026-285-2300
信濃印刷㈱	〒102-0072	東京都千代田区飯田橋4-1-11	TEL 03-3237-3601
㈱渋谷文泉閣	〒380-0804	長野県長野市三輪荒屋1196-7	TEL 026-244-7185
㈱眞興社	〒150-0033	東京都渋谷区猿楽町19-2	TEL 03-3462-1181
新日本印刷㈱	〒162-0801	東京都新宿区山吹町342	TEL 03-3269-3611
㈱精興社	〒101-0054	東京都千代田区神田錦町3-9	TEL 03-3293-3021
創栄図書印刷㈱	〒604-0812	京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766	TEL 075-255-2288
大同印刷㈱	〒849-0902	佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20	TEL 0952-71-8550
ダイニック㈱	〒105-0004	東京都港区新橋6-17-19 御成門ビル	TEL 03-5402-1811
㈱太平印刷社	〒140-0002	東京都品川区東品川1-6-16	TEL 03-3474-2821
㈱太洋社	〒501-0431	岐阜県本巣郡北方町北方148-1	TEL 058-324-2111
寶紙業㈱	〒102-0072	東京都千代田区飯田橋3-7-14	TEL 03-3261-5335
㈱竹尾	〒101-0054	東京都千代田区神田錦町3-12-6	TEL 03-3292-3617
㈱東京弘報社	〒101-0051	東京都千代田区神田神保町1-34	TEL 03-3291-1771
㈱とうこう・あい	〒104-0061	東京都中央区銀座8-11-11	TEL 03-3571-6000
東光整版印刷㈱	〒135-0006	東京都江東区常盤2-12-15	TEL 03-3632-0801
㈱トーヨー企画	〒602-0923	京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7	TEL 075-411-8288
図書印刷㈱	〒114-0001	東京都北区東十条3-10-36	TEL 03-5843-9700
㈱日新広告社	〒101-0061	東京都千代田区三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F	TEL 03-3263-9431
㈱日本経済新聞社	〒100-8066	東京都千代田区大手町1-3-7	TEL 03-5255-2198
萩原印刷㈱	〒112-0004	東京都文京区後楽2-21-12	TEL 03-3811-4272
㈱博報堂	〒107-6322	東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F	TEL 03-6441-6711
藤原印刷㈱	〒101-0052	東京都千代田区神田小川町2-4-5	TEL 03-3291-0191
㈱平文社	〒170-0005	東京都豊島区南大塚2-35-7	TEL 03-3944-0301
㈱堀内印刷所	〒335-0034	埼玉県戸田市笹目3-11-5	TEL 048-422-0029
㈱毎日新聞社	〒100-8051	東京都千代田区一ツ橋1-1-1	TEL 03-3212-3340
誠製本㈱	〒174-0042	東京都板橋区東坂下1-19-5	TEL 03-3967-3952
㈱遊文舎	〒532-0012	大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31	TEL 06-6304-9325
㈱読売新聞東京本社	〒100-8055	東京都千代田区大手町1-7-1	TEL 03-3242-1111
㈱ライトコミュニケーション	〒101-0035	東京都千代田区神田紺屋町11 岩田ビル5F	TEL 03-3251-7571
渡辺印刷㈱	〒152-0031	東京都目黒区中根2-7-1	TEL 03-3718-2161

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同下さり、ご支援頂いている各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

大学出版部協会・ブックレット

大学出版部協会 発行／東京大学出版会 発売【2014年6月刊】

2013年6月から4回にわたり開催された大学出版部協会創立50周年記念連続シンポジウム「新しい社会を拓く大学の力」の成果より、2点をブックレット化しました。　日本生命財団学術書出版助成図書

座小田豊　ざこたゆたか（東北大学大学院文学研究科教授）
田中克　たなかまさる（京都大学名誉教授）
川崎一朗　かわさきいちろう（京都大学名誉教授）

防災と復興の知　3・11以後を生きる

A5 判・80 頁／定価（本体 1,000 円＋税）ISBN978-4-13-003150-9

列島沿岸を巨大堤防で覆う？――これまで通りの高度技術をふりかざすだけで、はたして本当に強靭な社会をつくることができるのか。哲学・生態学・地震学による対話を通して、自然と社会を千年の単位で見直し、再生のための知のあり方を探る。

〈主要目次〉
第一章「ふるさと」の根源的な力と想像力の可能性（座小田豊）／第二章　森里海の連環から震災と防災を考える（田中克）／第三章　災害社会――本当に強い社会とは（川崎一朗）／終章「ふるさと」から「ふるさと」へ（座小田豊）

中村哲之　なかむらのりゆき（東洋学園大学人間科学部専任講師）
渡辺茂　わたなべしげる（慶應義塾大学名誉教授）
開一夫　ひらきかずお（東京大学大学院総合文化研究科教授）
藤田和生　ふじたかずお（京都大学大学院文学研究科教授）

心の多様性　脳は世界をいかに捉えているか

A5 判・80 頁／定価（本体 1,000 円＋税）ISBN978-4-13-003151-6

トリ、ヒト、それぞれが視る世界は同じものではない。赤ちゃんはいつごろから自分を自分と認識するのか。心の働きの多様性を比較認知科学・発達認知科学の視点からわかりやすく解き明かす。

〈主要目次〉
第一章　トリの「視る」世界――動物の錯視と心（中村哲之）／第二章　ヒト型脳とハト型脳（渡辺茂）／第三章　脳は世界をいかに捉えているか（開一夫）／第四章　討論――心の多様性と現代（藤田和生×中村哲之・渡辺茂・開一夫）／あとがき（藤田和生）

立教大学出版会

http://www.rikkyo.ac.jp/u-press/

徳田秋聲の昭和 更新される「自然主義」
大木志門 著 秋聲が意識的に具体的な諸状況に呼応する形で創作を行っていたことを様々な資料から検証。自然主義／私小説作家のイメージを刷新。
A5判上製 三一四頁 四〇〇〇円

ルワンダ・ジェノサイド 生存者の証言 憎しみから赦しと和解へ
ジョセフ・セバレンジ／ラウラ・アン・ムラネ 著
米川正子 訳 犠牲者80万人ともいわれる《ルワンダ・ジェノサイド》。もう悲劇を繰り返さないために。
A5判上製 三四四頁 四〇〇〇円

消費社会の新潮流 ソーシャルな視点 リスクへの対応
間々田孝夫 編 バブル崩壊以来、大きく変化した消費社会。多角的分析と理論研究により、現代消費社会の新局面を捉える。
A5判上製 一八二頁 三三〇〇円

（表示価格は税別です）
〒171-8501東京都豊島区西池袋3-34-1
発売＊丸善雄松堂株式会社
TEL03（4335）9314 FAX03（4335）9367

-筑波大学の知の発信-

筑波大学出版会

http://www.press.tsukuba.ac.jp/

【重版出来】 八木 勇治・大澤 義明 編著
巨大地震による複合災害
発生メカニズム・被害・都市や地域の復興
A5判 2900円＋税
ISBN978-4-904074-38-1

利益相反とは何か
どうすれば科学研究に対する信頼を取り戻せるのか
新谷 由紀子 著
A5判 2700円＋税
ISBN978-4-904074-35-0

サービスサイエンスことはじめ
数理モデルとデータ分析によるイノベーション
高木 英明 編著
A5判 3,100円＋税
ISBN978-4-904074-30-5

発売：丸善出版株式会社 TEL:03-3512-3256
http://pub.maruzen.co.jp/ FAX:03-3512-3270

金沢医科大学出版局

発売＝紀伊國屋書店 ☎03-3354-0131（代）

6日間で学ぶ 医学生・初期研修医のための
呼吸器外科画像問題集
佐川 元保 編集
国家試験レベルの画像読影力を短期間で獲得できる構成となっている．「問題と解答·解説」形式を主とし，繰り返し学習することで成果をあげる．
A4判，140頁，定価：本体2,000円＋税

解剖学者がみた
ミケランジェロ
篠原 治道 著
苛酷な幼児体験で［傷ついた脳］が天才ミケランジェロを生み出した．人体構造のプロフェッショナルが彼の彫刻に秘められた真実に迫る．
A5判，273頁，定価：本体1,800円＋税

金沢医科大学出版局
〒920-0293 石川県河北郡内灘町大学１－１
☎ 076-286-2211（代） http://www.kanazawa-med.ac.jp

〈世界教養〉の知の地平へ

サミットがわかれば世界が読める
高瀬淳一 ……名古屋外大ワークス１ 800円＋税*

世界が終わる夢を見る
亀山郁夫 ……Artes Mundi 叢書 1500円＋税*

留学と日本人
丹羽健夫 ……名古屋外大ワークス２ 800円＋税*

協同学習で物語を読む
新居明子 ……新しい授業のために 予価1300円＋税*

魯迅後期試探
中井政喜 ……学術書シリーズ 予価6500円＋税*

フランス語はじめの1000語
……大学生向け語彙集 予価 800円＋税

（＊は丸善雄松堂株式会社・発売）

名古屋外国語大学出版会
Nagoya University of Foreign Studies Press
〒470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山57番地
TEL 0561-74-1111 FAX 0561-75-1723
http://www.nufs.ac.jp/

（撮影：阿部卓也）

表紙写真：東京大学総合図書館にて
立花隆氏とのコラボレーションで開催した
展示企画「重ね書きの本棚」の様子
（2013年5～6月）

本の中で不意に書き込みに出会うとき、私たちはその向こう側に、別の誰かの思考を感じ取る。書き込みは、読み手の理解や解釈の痕跡だからである。この展示は、通常は禁止されている図書館の本への書き込みを促すことによって、書物を介した間接的な知的交流を生み出そうとする実験であった。

大学出版107号（2016年夏）
2016年7月25日発行
頒価100円（〒共）

発行所：一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北1丁目14番13号
メゾン萬六403号室
TEL 03-3511-2091　FAX 03-3511-2092
E-mail：mail@ajup-net.com
URL：http://www.ajup-net.com/

表紙デザイン：阿部卓也

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覧

■ 北海道大学出版会
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308　FAX 011-736-8605

■ 弘前大学出版会
〒036-8560 弘前市文京町1番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168　FAX 0172-39-3171

■ 東北大学出版会
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777　FAX 022-214-2778

■ 流通経済大学出版会
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-60-1167　FAX 0297-60-1165

■ 聖学院大学出版会
〒362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801　FAX 048-725-0324

■ 聖徳大学出版会
〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111　FAX 047-363-1401

■ 麗澤大学出版会
〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3320　FAX 04-7173-3154

■ 慶應義塾大学出版会
〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168　FAX 03-3451-3124

■ 専修大学出版局
〒101-0051 千代田区神田神保町3-10-3
TEL 03-3263-4230　FAX 03-3263-4288

■ 大正大学出版会
〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL 03-3918-7311　FAX 03-5394-3038

■ 玉川大学出版部
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935　FAX 042-739-8940

■ 中央大学出版部
〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351　FAX 042-674-2354

■ 東京大学出版会
〒153-0041 目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069　FAX 03-6407-1991

■ 東京電機大学出版局
〒101-0047 千代田区内神田1-14-8
TEL 03-5280-3433　FAX 03-5280-3563

■ 法政大学出版局
〒102-0073 千代田区九段北3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540　FAX 03-5214-5542

■ 武蔵野大学出版会
〒202-8585 西東京市新町1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003　FAX 042-468-3004

■ 武蔵野美術大学出版局
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810　FAX 0422-22-8309

■ 明星大学出版部
〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979　FAX 042-593-0192

■ 早稲田大学出版部
〒169-0051 新宿区西早稲田1-9-12
TEL 03-3203-1551　FAX 03-3207-0406

■ 関東学院大学出版会
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-5906　FAX 045-785-9572

■ 東海大学出版部
〒259-1292 平塚市北金目4-1-1
TEL 0463-58-7820　FAX 0463-58-7833

■ 名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市千種区不老町1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027　FAX 052-781-0697

■ 三重大学出版会
〒514-8507 津市栗真町屋町1577
三重大学総合研究棟Ⅱ 3階
TEL 059-232-1356　FAX 059-253-3095

■ 京都大学学術出版会
〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182　FAX 075-761-6190

■ 大阪経済法科大学出版部
〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-9129　FAX 072-941-9979

■ 大阪大学出版会
〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614　FAX 06-6877-1617

■ 関西大学出版部
〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-0238　FAX 06-6389-5162

■ 関西学院大学出版会
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-7002　FAX 0798-53-9592

■ 広島大学出版会
〒739-8512 東広島市鏡山1-2-2
TEL 082-424-6226　FAX 082-424-6211

■ 九州大学出版会
〒814-0001 福岡市早良区百道浜3-8-34
九州大学産学官連携イノベーションプラザ305
TEL 092-833-9150　FAX 092-833-9160

■ 東京農業大学出版会（休会）
〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL 03-5477-2666　FAX 03-5477-2747